

2006年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2006年8月25日(金)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A (北島中学校教諭)

パネリスト B (応神中学校教諭)

C (止揚の会事務局)

D (徳島市教育委員会社会教育課)

《司会》

ただいまより、2006年度人権地域フォーラムを開催いたします。開会にあたり鳴門市教育長古林がご挨拶申し上げます。

《鳴門市教育長》

皆さん、こんにちは。本日はようこそおいでくださいました。鳴門市教育長の古林でございます。よろしくをお願いいたします。

2006年度の鳴門市人権地域フォーラム開催にあたりまして、主催者を代表いたしましてご挨拶を申し上げたいと思います。皆様方には、残暑非常に厳しい中、お忙しい中を、大変たくさんの方々にご参加をいただき、まことにありがとうございます。

日頃は、同和問題を初めさまざまな人権問題の解決と、「人権が尊重される町づくり」の推進に格別のご尽力をいただきまして、心から敬意と感謝を申し上げます。ご承知のように、「人権」は人が人として生きていくための大切な権利であります。すべての人々の人権が尊重され、「差別のない社会」を実現することは、これまでも私たちが心から願い、活動をしてまいったところでございます。しかし、今だ「差別の完全解消」には至っておりません。

基本的人権が十分に尊重されているとは言えない状況がございまして、「部落差別」を初め、深刻な人権問題が列挙されているのが現実でございます。更に、「児童虐待」のニュースや、人命を軽視したような事件があまりにも多く発生しているのが、昨今の状況でございまして、「人権教育」や「啓発」の、いっそうの推進と必要性を改めて感じております。

申し上げるまでもなく、「人権問題の解決」は私たち一人一人の課題であります。私たち自身が、「人権尊重の社会」を築く担い手であることを深く認識すると共に、「人権問題」を自分の問題としてしっかりと捉え、その解決のために主体的に取り組んでいくことが、「人権尊重の社会」を実現するためには最も大切ではないかと考えております。

そうした思いも込めまして、本日のフォーラムは、前にテーマにも掲げておりますように、『ひとつと』から『わがこと』へ』をキーワードとしまして、同和問題を通して自己の生き方やあり方をみつめ、語り、そして人と人がつながる学習を通して、「人権感覚」や「人権意識」を高める研修の場になって欲しいと考えたわけでございます。皆さん方一人一人が、「人権尊重社会の創造」を目指すうえで、実り多いフォーラムになれば大変ありがたいと思っております。

最後になりますけれども、今年度も、このフォーラムの開催にあたりまして、松茂町、北島町、藍住町、板野町、そして、上板町の、各町人権教育推進協議会の皆さん方のご協力をいただきました。また、コーディネーター、パネリストの方々の格別なご理解によりまして開催できますことに、改めてお礼を申し上げます。開会にあたりましてのご挨拶といたします。どうぞ、最後までよろしくをお願いいたします。(拍手)

《司会》

どうもありがとうございました。それではまず、本日の人権地域フォーラムにお招きしました、講師の皆様をご紹介させていただきます。お名前をお呼びいたしました講師の皆様方は、恐れ入りますが、順次壇上の席までご移動くださいますようよろしくお願いいたします。

まず初めに、本日のコーディネーターをしていただきます、Aさんです。(拍手)続きまして、パネリストとして、御教授いただきます方々をご紹介させていただきます。「止揚の会」事務局、Cさんです。(拍手)続きまして、徳島市教育委員会社会教育課、Dさんです。(拍手)最後に、徳島市立応神中学校教諭、Bさんです。(拍手)本日は以上4名の講師の皆様方に、『ひとごと』から『わがこと』へ ～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～』というテーマでフォーラムを進めていただきます。それでは、A先生、以降の進行につきましてよろしくお願いいたします。

《コーディネーター A》

こんにちは。(会場より「こんにちは」)一昨年から3年続けて、『ひとごと』から『わがこと』へ』というテーマで人権フォーラムをやらせていただくことになりました。

非常に切ない現実がまだまだあります。私たちは今、それぞれの町で、そこに暮らす一人一人が、生き生きと輝いて自己実現ができる。そんな「人権の町づくり」を目指して、様々な取り組みを展開しています。ある町に於いては、4月からスケジュールを練って、地区別の懇談会を頑張っています。私は今、中学校の現場にいますが、教職員と共に、その中にどう参画していくか。そんな思いを共有しようという状況があります。

昨年度まで、私は松茂町と板野町の教育委員会でお世話になっていました。人権問題を生き生きと語り合う関係というのが、人間の生命をこんなに輝かせていくのかということ、私は2つの町の営みの中で実感してきました。

昨年の12月に、松茂町におきまして、『小・中学生と共に学ぶ人権のつどい』というのを企画しました。

それまでは、「小・中学生の意見発表」があって、その後にコンサートであったり、講演という形だったわけですが、小学生3人、中学生3人の意見発表をそのまま「テーマ」として、そこに集まった町の様々な年代の人たちに多様な意見をいただきました。

一人一人の発言を通して、一人一人の具体的な生活の事実を通して、人権問題を深く学び合うという場を設定してきました。

小学生が、大きなフロアの中で真っ直ぐ手を挙げて、マイクを持って生き生きと語る姿に、中学生がそれに一生懸命思いを返していく中で、隣町の同和地区出身の中学生が、おばあちゃんが受けてきた部落差別の現実を必死に訴えてくれました。その発言が会場の空気を変えました。そこに参加した人が、その場に集まった意味を深く自覚していく。そんな発言になりました。

住民の方々が、様々な研修の場で出会ってきた思いを語ってくれました。また、大学生が自らの置かれた厳しい生活の現実を語ってくれました。行政職員が、行政の研修の中でつかんだ思いを堂々と発言してくれました。あっという間の2時間でした。(冊子をフロアに見えるように掲げながら)それを、こういう形の1冊の本にまとめました。表紙に6人の小学生・中学生の壇上に座っている姿があります。そして、フロアの写真があります。

多くのアンケートが寄せられました。その中に、そこに集えた喜び、その語り合いに参画できた誇り、そんな思いをしっかりと届けてくれるいくつかのアンケートがありました。40代後半の方から、こんな文章をいただきました。

「松茂という町が、思いを語り合えるコミュニティになっている。そう実感しました。普段から、互いのことを思いやりながら、生活をしていきたいと思います。部落差別は『差別する側の問題』であることと、『差別する者は、自らの差別によって、自分自身を滅ぼすこと』を忘れてはいけないと思います。

自分と違う価値観を持った人を排除するのではなく、よく話し合い、理解し合い、認め合う人間関係を築き上げていきたいと思います。」

今年度は夏休みに実施されました。会場を見渡させていただいたら、様々な年代の方が集まっておられました。ちょっと見たら、「小学生かな」「中学生かな」という顔や、高校生、大学生も語ります。学校の先生方もたくさん発表されます。

私たちに問われていること、私たちにできること、具体的な生活の事実と重ねながら、私たちが人間として解放されていく。そして、どんな状況に置かれても自己実現が可能となる。そんな「人権の町づくり」になっていくこれからの時間になればと思います。

3人のパネラーからいろんな思いが語られます。昨年はすごくいい調子で紹介しましたが、(Bさんに向かって)お父さん、今年も来てくれているの？(「はい」)今年ちょっと控えめにします。(会場から笑い)

昨年度も、パネラーとしてこの場を一緒に作ってくれたんですけど、板野中学校で一緒に取り組みをしてきた仲間です。今、応神中学校で様々な取り組みを展開しています、B先生です。(笑顔で名前を確認しながら)名前をよく間違えられるんです。「まさし」と読まれます。やっぱり、名前を間違えると失礼なことになりますので…。

昨年の思い。また、昨年『広報なると』にも、その思いを出してくれたわけですけど、教え子の結婚差別の問題を通して、問題提起をしていただきました。遠くのことに對しては、美しい言葉を並べることはできません。でも、利害が絡んで自分の問題になった時に、なかなかそうはいかん現実があります。今から20分ほど、「Bワールド」を楽しんでいただけたらと思います。それでは拍手で迎えてください。(拍手)

《パネラー B》

(手渡されたコンパクトなマイクを眺めたり持ち替えたりしながら)笑いますよね。あ…。あ…。(マイクに声が入っていることを確かめるしぐさの中で)Dさんが持ってきたの？(笑いの中、改めて姿勢を正しながら)応神中学校のBと言います。はじめまして。 昨年も、ここで、教え子の直面している部落差別の現実についてお話をさせていただいたんですが、今、同じ年代のパネリストが3人並んでいます。(コーディネーターより「無理があるよ」)(笑い)気持ちは「同じ年代」なんです。

全同教徳島大会前日の公開授業で歌った「サライ」

後で、インパクトの強い話がどーんと出てきますので、「Bがおったけれど、何を話していたか覚えてないわ」ということになろうかと思いますが、お付き合いください。

今年は、「教え子」というよりも、「学校教育」のことになろうかと思いますが、話をさせていただきたいと思うんです。明日、明後日と、『愛は地球を救う』という24時間のテレビ番組がありますね。御存知ですか？よく宣伝をしていますね。あの番組の中で曲が流れますね。(ハミングしながら)すみません。あの曲が流れると思ひ出すんです。12年も前の話になります。12年前、僕は中学2年生を担当していました。覚えておられる方がいると思いますが、その年に、『第46回全国同和教育研究大会徳島大会』がありました。

その時に、当時勤務していた板野中学校で、「大会前日の関連行事」として、『公開授業』をやったんですよ。僕ともう1人の先生で、その『公開授業』をさせていただいたんですが、その授業を作る時に、段取りをつけながらやっていくんですが、その時に、まあ、いい加減なクラスですよ。これが…。あ、すみません。今の言葉は語弊があります。「いい加減な担任が持っているクラス」だったんです。生徒がいい加減で

はなく、先生がいい加減だったんです。先生がいい加減なものですから、生徒が考えるんです。

生徒が、「歌を歌ってから授業をしたい」と言い出したんです。当日の授業は、体育館で、参観者が1000人近くの予定でした。その前で授業をするんですけど、僕が、「かまわないよ」と言うと、生徒が歌をリストアップしてきました。その曲の一つに「サライ」という曲がありました。さっき、僕がロズさんでいたのが「サライ」という曲です。当時、僕はその「サライ」という曲を知りませんでした。「何や、それ」と言うたら、歌詞カードを持ってきてくれたり、歌ってくれたりするんですけど、いっこうにわからないんです。

あの曲は、確か、作詞が谷村新司で、作曲が…加山雄三でしたね。わからないなりに、『「サライ」って、いったいどういう意味やねん』という話をした時に、あくる日、谷村新司の事務所の電話番号を調べてきた子がいたんですよ。それを持ってきたものですから、「あ、これは『電話して』っていうことかな」と思って、すぐに職員室に行って、谷村新司の事務所に電話をしました。

そうしたら、受付が女の人だったんですけど、丁寧に答えてくださったんです。これは覚えていてくださいいね。持ちネタで喋って下さい。「サライ」というのは、ペルシャ語で「心のよりどころ」という意味なんです。(にっこりして)今、…皆さん、「ふうん…」って言われましたよね。うれしいなあ。「そういう意味で、谷村は詩を書いたんです」ということを、先ず電話をした時に伺っていました。「ああ、そうなのか…」と思いました。

ちょうどその時の授業に、山口県光市の丸岡忠雄さんの、「ふるさと」という詩を使って授業をすることになっていました。「これはちょうどぴったり合う」と思って教室に行き、生徒達に電話のやり取りの話をしたらみんな大喜びをしました。

「どうしたら差別はなくなるんですか？」から始まる中学生を取り巻く現実

ちょうど、その年の4月、そのクラスの道徳の授業で、「どうしたら差別はなくなるんですか？」と、泣きながら訴えた女の子がいるんです。

不思議な縁で、実は、私は去年まで応神中学校で1年・2年・3年と持ち上がりで担任をしていたんですが、今話した女の子の結婚相手の妹を応神中学校で担任したんです。町は全然違うんですが、不思議な縁だと思うんです。

その、去年まで担任していた妹が、去年の暮れの授業の中でこんなことを言っているんです。(昨年度の応神中学校編集の『マイ スカイ』という3年生の授業実践記録を開きながら)

「うちのお兄ちゃんが、まだしていないんやけど、『結婚する』って親に話を持ち出したときに、父さんが一番最初に言った言葉が、『彼女は部落でないか?』って聞いたことだったんよ。ほれで、ほんまに『違う』って思うんよ。部落とかじゃないと思うって言うんやけど、兄ちゃん。ほれでも、父さんは調べるとか、そうやって言いよって、しつこかったけん、私が怒って、『何でそんなの関係あるん?』って聞いたんよ。ほしたら、兄ちゃんが部落の人と結婚したら私が結婚するときに困るとか言われて、私が困るとかって、私がほれていいと思ったら、ほれていいで。ほんまは私のことだけじゃなしに、自分ややって、部落って思われるのが嫌なだけなんかなって思ったりして、この後はなんも返せんで悔しかった。」

この子が、その場でどうしてそういう発言をしたかという、伏線になる元のこんな発言があったんです。これから紹介する発言を受けて、今の妹の発言になったということです。(『われら地球人』より)この女の子は、今、高校1年生で、中学3年生の時の話です。

「この話は、私が小学校6年のときの話なんやけど、私がある日、家に帰ったら、うちの姉ちゃんがめっちゃめっちゃ泣きよったんよ。ほんまに、『どうしたん?』って聞いたら、すごい顔をして、『どうしよう』って、『子どもができた』って。

姉ちゃん、そのとき、19歳かな。20歳かな。そのくらいの時だって、「どうしよう」「どうしよう」って言って、まだその

彼氏に言ってないって言いよって。

その晩、やっぱり彼氏と話をして、そうしたら、『結婚しよう』って言ってくれたらしいんよ。『産んでくれ』って。そのことをうちの両親に話したら、『姉ちゃんの彼氏の親はどうなん?』みたいな。今度、姉ちゃん、彼氏の家に行くって。普段はすごく大切にしてくれるらしいんよ。普通に。姉ちゃんの彼の家に行ったら、姉ちゃんを可愛がってくれるというか。

でも、『子どもができました』っていうのを言いに行ったら、姉ちゃんの彼は長男で、私も行ったことがあるんやけど、すごいおぼっちゃまみたいなのでっかい家で、長男で、『やっぱり家におって欲しいし、結婚はできんなあ。』みたいな。『お金なら払うけん、降ろして。』みたいな。

うちの両親が、『部落の血はいらん。ほんな汚い血はいらんいうことか。』みたいなことを言いよったんやけど、一番辛いのは姉ちゃんて、そこで姉ちゃんの彼氏は何で反論せんかったんだらうって、私は思うんよ。ほんて、その子どもは墮されたんよ。」

ということをね、話したんです。

私は、中学3年生の女の子が、「授業の中でこの話を言う」と言った時、「やめときいや。そんなの言わんでもいいよ。無理せんでもいいよ」と言ったんですよ。「無理して言うようなことじゃないから、やめとき」そう言ったんですが、「絶対に言う。絶対に言わんと、私のことをわかってもらわれへんし、みんな真剣に考えてくれへん。だから、これは絶対に言わなれんのか」と言って初めて彼女はこのことを言ったんです。

それに対して、さっきの発言があったんです。「私の家ではこうや」と。そうすると、こんな発言が出てきたんです。さっきのは部落差別に関わる発言でしたが、その時に、今から話す子もいたたまれんようになったんですね。

この子は、生まれて3ヶ月で両親と離れました。お母ちゃんが家を出て行きました。お父ちゃんも家を出て行きました。おばあちゃんに育てられました。お母ちゃんの記憶はいつさいありません。お父ちゃんは、家を出て、別のところで別のお母ちゃんと一緒に暮らしているんです。ですから、ずっと、小さい時からおばあちゃんと一緒に暮らしているんです。その子がこう言うんです。

「お姉ちゃんの場合は、生まれて来れなかったけどな、私は生まれてきたで。…捨てるんだったらな、…産まんかったらよかったんでな…思うんよ。この中にも部落差別で結婚できん人もおるかもしれんけど。ほんてな、差別に会わんかってもな、子どもを産むんだたらな、最後までちゃんと育てて欲しいんよ。今、家に赤ちゃんがいるんやけど、『これくらいで来たんじよ』って言われて、なんか悲しくなって、『何で私って生まれてきたんかなあ』って思う。もし、私に赤ちゃんが生まれたら、私みたいな思いをさせたくないけん、これから頑張っていくたい。」

そういう発言がありました。

もう、涙、涙の授業で、私も涙があふれてきた授業だったんですけど、このことを通して、やっぱり「家族のことを考えたいなあ」と思ったんです。この発言が「ひとごと」やったら、それで終わりなんですけど、この発言を、「わがこと」に考えた時に、「では、うちの家族はどうなのかな」と考えたいと思ったんですよ。

お父ちゃんが、今年もこの会場に来てくれているみたいなんですけど、随分と対立した時期もあった親子なんです。でも、こうして「会」があったら来てくれる。そういうことが僕はすごくうれしいです。そういう家族関係みたいなものをみんなが作っていけたら、差別ってなくなるのと違うかなと思うんです。

今日の「徳島新聞」の最後の方に、「中・高校生による人権交流会」かな？その記事が出ていました。また、帰られたらご覧になってください。そこでも、いろんな差別の実態が中・高生から語られています。何か昔のこのように言われがちですが、全然そんなことはないです。

今、中学生たちの「生の声」を読んだものを聞いていただいていると思いますが、昔のことなんて、全

然そんなことはありません。今もなおかつ、いろんな形で残っている部落差別。また、部落差別ではなくてしんどい部分がたくさんあるんじゃないのかなと思います。この後は、また続いて話をしてくれるんじゃないかと思います。もう、時間ないですね？…以上で終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。会場の皆さん。毎年、どうしてこういうフォーラムをするか。また、どうして、それぞれの市や町の課題として、同和問題を取り組んできたか。人権啓発に頑張っているか。今、ここに、やっぱり血を吹いているわけですよ。私は3年間学校現場を離れていまして、4月から北島中学校に赴任しました。その前に板野中学校にいました。

板野中学校では、クラスに6人7人と地区の子がいます。地区の子の、「俺がそうなんよ。」「うちの母ちゃんがな…」という発言を聞く学校と、そういう会話と、そういう思いに全く触れ合うことがない学校というのは、やっぱり子どもの意識は違うんですね。だから、確かな学びがいます。体験的な学びがいます。人とつながっていく、人を知るという学びがいます。

北島町で9月から地区別の懇談会が始まります。この懇談会を、参加者を増やしていくという必死の取り組みの中で積み上げてきているものは、やっぱり、ここにあると思うんです。「差別」というのは、「する方」も「される方」も不自由になります。人生の一番幸せな時、幸せな瞬間が、一番苦しい。こんなことがあったまるとかと思えます。

実は、C君と、この2月に愛媛の愛南町という、四国の中で、この鳴門から最も遠い町です。そこで、「人権ふぉーらむ」を一緒にしたんです。その時に彼女を連れて来ました。本当に厳しい状況の中にある2人です。そのふぉーらむの次の日に、愛南町にある高校で私が話をした時に、彼女に、「その思いを語ってみるか」と言うとうなずきました。私の講演の最後に、彼女が直面しておる差別の現実を、精一杯の言葉で、1000人を越える学校の生徒に語ります。高校生が震えました。

その1000人の中で、地区の子は数名です。3人か4人です。「何とかせないかん」という思いで、たった3人か4人の地区の子が、手を挙げてその思いを訴えました。聞く高校生が必死に返します。人と人とのつながりで学んでいくんです。私たちの中に生きてつながる、そんな時間になったらなと思います。いろんな思いが溢れているだろう。しゃべってくれたらうれしいなと思います。C君、いきましようか。

《コーディネーター A》

(立ち上がったCさんに対し静かな会場に向かって)拍手がないようですが…。(笑いと共に会場より拍手)

《パネラー C》

えー、後ろの方の人、聞こえますか？昨年の人権フォーラムでも僕はお世話になって、最後に歌を歌わせてもらったCです。やりたい放題をやっすみません。

昨年付き合い始めた彼女

あのね、今、A先生が話してくれまして。僕は、今日は何をしゃべろうかなと思ったんですが、一番出てくるのは自分の恋愛のことで。実を言いますと、僕は先月7月12日に、1年付き合った彼女と結婚をしました。その結婚に至るまでの話をしたいと思います。

先ほど、ちょっとA先生の方が話してくれましたが、僕は、去年ここで「人権フォーラム」をやった時に、付き合いって2ヶ月の彼女がおりました。それは、あの時にはまだ言わなかったのですが、県内の神山町出身の子です。僕より2つ年下で、今は、香川医科大学の助産師をしています。

僕は、その子と去年の7月12日から付き合い始めまして、今は妻なんですけどもね、まあ、かわいらしい人だね。(笑い)自分で言うてもね。みんなが言ってくれるんです。(会場大笑い)小柄でかわいらしい人なん

ですよ。

その子と恋愛をして、つきあいを続けていく中で、僕は被差別部落の出身なので、今話している「部落問題」というのは「避けては通れないだろう」というふうにずっと思っていました。それはなぜかと言うたら、今まで僕が恋愛をしてきた経過をみますと、部落外の子と恋愛をした場合は、今まで、100%何らかの闘いになっています。

僕は神山町に友人もおりますし、神山町の差別の実態というのは、今までの「差別」として報告されている中でも、かなり厳しいものがありますので、今回も闘いになるだろうなと思っていました。

僕は、こういった講演会活動やシンポジウム。あと、学校の中に入って授業をさせてもらっている。そして、「部落差別をなくす活動をしている」ということを、付き合う前に、まず自分の彼女に伝えていました。「ほんなん、関係ないで。今どき、ほんなん言う人おらんのとちがうの。」どちらかという、「放つといたらなくなるのと違うの。」そういった感じの、ちょっとにぶい女の子(笑)だったんです。

お父さんやお母さんはどうなのかと聞くでしょう。そうすると、「そういえば、小学校の時に1回、道徳の授業で同和問題のことを話して、家に帰った時にお母さんと言ひ合いになって、その喧嘩をして以来、一度も話してないな」と言うんですね。

「ああ、これはかなり差別心が強いお母さんだな」と、僕は思ったんです。でも、彼女は「まあ、いけるのと違う」と言いました。「いや、そんなことはないだろう」と思いながら、僕も結婚を考える年頃です。(笑)「もう、そろそろ結婚しようかな」と思っていましたので、付き合い始めてすぐに、うちに連れて来て、僕の家のお父さんや、お母さん、じいちゃんに会わせました。

一緒にご飯を食べて、一緒にビールを飲んで。休みの日はほとんどうちで一緒に過ごしています。そういった生活をずっと続けて行っている中で、僕が、いつも、「僕は、いつでもお父さんお母さんにあいさつに行くから。宏美ちゃんを育ててくれた大事なお父さんお母さんだから、僕も一回あいさつに行きたいから」と言っていたんです。

「結婚したい人がいる」宏美が家族に伝えてから

彼女はね、やっぱりそれを言うのに勇気がいるんです。「結婚したいと思う彼氏がいる」ということを親に伝える勇気が要るんです。そこには、やっぱり、少し被差別部落に対する「差別心」があったと思います。彼女は年間2回位しか家に帰らないんですが、10月くらいに帰りました。その時に、娘ももう年頃ですからね、お母さんが言うわけです。「あんた、もう、そろそろ結婚せんといかんよ。お母さんが公務員を見合いに連れて来てあげるからどう？」(笑)まあ、これはよくある話ですね。

その時に彼女は、「今がチャンスだな」と思って言ったそうです。「実は、来年くらいに結婚しようと思つとる人がおるんじゃ」と…。「どこの人?」「山川町の人じゃ」と言ったら、すぐその後、「同和の人じゃないんだろうな」という言葉が飛んできました。皆さんは知っていますかね。山川町の同和地区というのは、そんなに大きくはありません。規模としては小さいです。でも、すぐに聞かれたんですね。彼女は悟ったんです。

その時に、彼女はこう答えました。「彼の中身を見てもらいたいから、とりあえず、もしそうだったらどうする?」そうしたらお母さんは、「家を出て行きなさい。」こう答えました。それは別れ際だったので、その時には彼女はあまり言わずに、自分の暮らしている家に帰りました。その時に、親が差別心を持っているということに初めて彼女は気づいたんです。11月6日の日です。これは僕は忘れもしません。

彼女は3人兄妹の一番末っ子で28歳です。真ん中の兄ちゃん、30代半ばで消防士をしています。一番上の姉さん、30代後半で、臨時ですが学校の先生をしています。こういう状況の中で、11月6日に家に帰ってきました。その時に、僕を連れて行って紹介したいということを、家にいるお姉ちゃんに伝えました。「11月6日に彼氏を連れて帰るから、お母さんに言うといてな。」そうしたら、そう伝えられたお母さんは、そのと

き言いました。「どこのどんな人かもわからん人を、結婚するといきなり連れて来られても困る。」

まあ、一番最初ですから、どこのどんな人かもわからんのはあたりまえですね。(笑い)会う前からわかっていたら、これは怖いですね。こういう言い方をされました。かなり僕のことを敬遠しています。その時には、僕は「行かない方がいいかな」と思って行きませんでした。

その11月6日…。彼女は家に帰り、彼女と、お姉さん、お母さん、おばあさんと話し合いをしました。彼女はすごく僕のことを良く言ってくれて、「誠実で、真面目で、かつこよくて、足が長くて…。」(笑い)ま、ここまでは言っていないが、僕のことを誉めてくれました。

彼女は、僕が被差別部落の人だということを言おうと思ったんですけど、横で、お姉ちゃんが「言わん方がいい」とサインを出したみたいで、その時に言いませんでした。

彼女のお父さんお母さんは、両方とも神山町で見合いで結婚しています。お母さんの実家は近所です。その日、お母さんはおはぎを作り、実家にそれを持ってお裾分けに行きました。そこにはお母さんのお兄さんがいます。

その時に、隣に僕の彼女が居ったんですけど、お母さんはこう話すんですね。「一番下の娘が結婚したいと言うんやけど、山川町のひよっとしたら同和地区の人かもわからん。」そうしたら、このお兄さんが言ったのが、「今どき、そんなこと気にすることないのと違う。そんなことより、経済的に困難とか、身体が不自由とか、そんなことを確認しておいた方がいいのと違う？」ということでした。

これもはっきり言って問題発言です。が、とりあえずその時は、部落問題については仲間がおると思っとうれしかったそうです。「お母さん、(お母さんの)お兄さんはこういうふうに言ってくれよるで」と…。

帰って来て、僕の家に来て、彼女はニコニコしながら、「お母さんのお兄さんは見方になってくれそうだと話してくれました。話をしていたら、お母さんから彼女の携帯電話に電話がかかってきました。

聞き合わせから始まった結婚差別

その時の内容というのが、「絶対に許さん。今すぐ別れなさい。香川の病院も辞めて、徳島の病院に帰って来て実家から通いなさい。」これはなぜかと言いますと、その相談した「そんなのは関係ないのと」言っていたお母さんのお兄さんが、これは、せんでもいいのに山川町の友人に、「山川町のCってどんなんえ？」と聞き合わせをしているんです。身元調査ですね。

そうすると、その時聞かれた方は、「絶対やめといた方がいい。事故を起こしたら怖いけんなあ。(笑い)集団でやってくるけんなあ。葬式の時、いっぱい親戚中集まってドンチャン騒ぎして、宴会をして、後でビールを飲んだりして暴れるらしいよ。(笑い)部落に嫁に行ったらな、ごっつい大事にしてくれてな、大事に大事にしてくれて離さんらしいよ。」面白いことをいっぱい言ってくれます。これを聞いて、「同和地区であるかどうかは、今どき関係ない」と言っていたお兄さんですが、180度態度を変えます。世の中で一番多い人間です。「周りの人間に左右される」という、一番多いタイプです

こんなことがありました。山川町のその友人というのは、当然、僕の家のごことは全く知りません。あたりまえです。その中で、お母さんがそれを聞いた時に、「もう、絶対別れなさい」と、娘に説得してかかります。彼女は泣きながら、「そんなの関係ない。部落の人であろうが、部落の人でなかろうが、良い人もおったら怖い人もおる。優しい人もおるだろう。そんなこと、個人で一人一人違うから関係ない。」そう泣きながら叫んでいます。でも、お母さんは聞く耳を持っていません。僕はこのままではいかんなあと思いました。

彼女が家に帰った時の家族の対応

次の週、とりあえず彼女がもう一回実家へ帰りました。お父さんは、彼女が一番下の娘ですから年が少し離れています。娘がすごく可愛いんですよ。可愛いからあまり怒れない。上には厳しいんだけど、下には優しい。そういうお父さんです。

彼女は、「まさかお父さんは差別はせんと思う」と言っていたんです。僕は「たぶんこれは会えんだろうな」と思って、お母さんが、僕のことを「どんな人かもわからん」と言っていたから、僕がいつも行っている講演の、僕のしゃべっている様子をビデオテープにしたものを、彼女に渡しました。「家族全員で観てもらって。そうしたら僕がどういう人間か大体わかるから。」そうして、彼女が家で話し合いをする中で、僕のビデオを観ると僕が被差別部落の人間だということは明らかですよね。そうしたら、そのビデオを観たお母さんは、半狂乱で家の中を走り回ったそうです。

お父さんはどんな行動を取ったかといったら、「ビデオを観たら、良い子で誠実な子で、真面目な子だというのはわかる。そうだけれども、わしはようわからんけど、部落の者は好かんのだ」理由はそれだけです。

その時に、学校の先生をしているお姉ちゃんが、初めは思いっきり言ってくれるんです。「あんたの言うていることは間違っているだろう」と言うんです。「会うてみて。本人に会うてみたらわかるわ。」言い合っているんですね。そうすると、お母さんに、「あんたは関係ないからだまっときなさい」と言われたら、クシュンとなって黙ってしまう。そういうタイプのお姉ちゃんです。宏美はすごく苦しいです。

その次の日(日曜日)に、お父さんの弟、お母さんのお兄さんが彼女の家に来ます。この4人が、僕の家族に対し、ありとあらゆることを言って反対します。お母さんのお兄さんは、事故で車椅子の生活をしているんです。ですから、自分のことを卑下する言い方でこういうことを言うわけですね。「絶対やめとけ。うちにも迷惑がかかる。わしは経験があるけど、部落の者と結婚して上手いこといった者はない。みんな離婚しとるわ。わしは知っとる人で、部落の者と結婚すると言って妊娠して、わしはこれを降ろしたことがあるんだ」と大きな声で言うんですね。これは大きい声で言うことじゃないですね。

これを聞いて、いつも威厳のある彼女のお父さんが泣き落としなんです。泣きながら、「頼むから行かんといてくれ。」ここでね、仲間のおらん彼女は追い込まれていくんです。「ああ、この状況を何とかしたいなあ。この状況から抜け出したいなあ」と思うんです。周りから「おまえ、よう考えとけよ」と言われて、「うん、わかった…。」彼女は、思いっきり一生懸命言い返そうとするんですが、何を言っても向こうは聞く耳を持たないから、一切話し合いになりません。お父さん、お母さんは、自分の言いたいことだけです。娘の言うことを聞きません。

集まってくれた仲間に励まされて

彼女は帰って来て、今日もここに『友輝の会』の仲間、友だちが来てくれているんですけど、その仲間が緊急で集まって彼女を励ましてくれました。「あのな、長い時間がかかるかもわからんけど、『お父さん、お母さん。私は幸せになった。』この姿が親にも幸せだと思うから、あきらめずに一緒に頑張っていこうな。絶対いけるよ。」こう励ましてくれるんです。僕が言うのと、僕の友だちが言うのと全然違いますよ。仲間ってありがたいです。

彼女、やっぱり苦しいんです。彼女は香川で寮生活をしていますから、香川へ帰ります。香川へ帰ったら、彼女の家から、「いついつ荷物を取りに行くから、荷物をまとめて用意して置けよ。わしが迎えに行くからな。病院の先生にも辞めると言って連絡するからな」と言ってきました。いついつ迎えに行くという期日を定めた段階で、僕の経験から言って、これは監禁される可能性が強いので、僕の友だちの家に彼女を寝泊りさせてもらいました。結局は来ませんでした。脅しです。

彼女のお姉ちゃんとお兄ちゃんのこと

そんな中で、僕は少しでも彼女を助けるために、彼女のお姉ちゃんに会おうと思いました。親が反対をしても、お姉ちゃんとお兄ちゃん2人が賛成してくれたら、親を説得するのはどうってことはないからです。僕はお姉ちゃんに会いました。僕はお姉ちゃんに「家で彼女は苦しいと思いますけど、いろいろ力になってください。」

このお姉ちゃんに話をした時に、ここにおられるA先生の話をしたんです。「板野のA先生って知ってい

ますか？」こう見えても、A先生って結構有名なんですよ。(笑い)「小学校の先生ですか？」と言うので、「中学校で、板野中学校のA先生って知りませんか？」と言うと、「知りません」と言うんです。(Aさんより「それは知らんわな」笑い)そうですかね…。僕らの年代で、10年間学校の先生をしていたら知らん人がいないというくらい、以外と有名なんです。

この時にお姉ちゃんが言うんですね。「うちの親は同和教育を受けていないから差別をすると思うんよ。基本的には悪い人ではないんやけどな。」それに対し、「ああ、そうですよね」と僕も言ったんです。この時にお姉ちゃんとは話ができました。お姉ちゃんは、家では妹の結婚については一切話をしません。

お兄ちゃんは消防士で、結婚しています。2人子どもがおります。お兄ちゃんがキーマンになるだろうなと僕は思っています。彼女に「お兄ちゃんと会えるように設定してな」と言ったとき、初め、お兄ちゃんは、可愛い妹の言うことですから、「会うてやってもいいわ」という言い方をしました。彼女が、「会うてな。真面目な子やけん。気に入ってくれると思うわ。お父さん、お母さんを説得するのを手伝ってな」と言った時に、初めは「うん。」「うん。」と言っていたんですが、お兄ちゃんが引っかかる部分があるんだそうです。

学校で同和教育を受けていた時には、部落の子だろうがなかろうがそんなことは関係ない。そんなものは、個人個人によっても違うから、そんなことはどうでもいい話だと思っていたけれど、自分が消防署に働きに出た時に、たまたまその消防署の前でもめたらしいんです。この時の消防署の人が、どうも被差別部落の人で、この時にもめてから被差別部落の人は好かんのだ」と言いました。

これね、差別の術中にはまっています。はっきり言って、その面倒な人と僕を一緒にしないでくださいね。(笑い)僕は笑いごとのように聞いていたんです。お兄ちゃんは、どちらかと言うと、30%は賛成してやりたけれど70%は反対だと答えました。

僕はお兄ちゃんに、僕の講演のDVDを奮発して渡しました。(笑い)そのDVDをお兄ちゃんに持って行ってくれた子が、僕の親友の、その町の「青年会」の子です。お兄ちゃんとは小学校が同級生で、めちゃめちゃよく知っています。その子が消防署まで、DVDを持って行ってくれました。「これを観てくれる」と言って渡してくれた子に、お兄ちゃんから返った言葉が、「この子は、この講演だけで生計を立てていきよるんか？」(笑い)話が横の方にそれているんですが、「とにかく、これを観てあげてな。」

やさしい癒し系の僕の親友は、こう言うとお兄ちゃんにDVDを預けます。そうしたら、しばらくして、お兄ちゃんから返事が返ってきます。「わしは絶対に会わん。何でかという、自分の子どもが部落の人と結婚すると言ってもやっぱり反対するけん、わしは絶対今回も反対じゃ。」これはもう、決定です。僕はそれまでに何となくお兄ちゃんからの返事がわかっていたので、とりあえずお兄ちゃんに「僕は人間である。赤い血が流れている」ということを観てもらいたかったので、講演のDVDを渡しました。

結婚差別を乗り越えていった先輩たちの現実…そこから思うこと

方法としては、僕がお父さんお母さんのところに行って話をすることしかありません。そうですよね。もう、つなぎになる人がいないわけですから…。僕は、経験上、この状況で行ったら、お父さん、お母さんには、100%会えないなと思っていました。でも、僕の先輩達は言ってくれます。高校の時に聞いた一番衝撃的な話です。「C君、わしらは結婚するときに、20回、30回玄関の前まで行ってな、『おまえと話すことはないわ』と言って、塩をふられて、玄関で茶碗を割られて、それでも20回、30回行ったわ。わしはあきらめずにずっと行ったんだ。そうしたら、ドアを開けてくれて、『話を聞いてやるわ』って。今は孫も生まれて、孫のことを大事にしてくれるんだ。」

一緒に講演を聞きに行っていた僕のまわりの学校の先生と役場の職員は、この話を聞いて言うんです。「今日の話は、感動的ないい話だったなあ。」それを聞いて、僕は「はあ…？」と思ったんです。しょうもないことを言わないでください。本当に。あのね、この話は「いい話」に聞こえるかもしれませんが、こういう内容ですよ。部落の「同和教育」を勉強している青年と、部落外の「同和教育」を受けていない子のカップ

ル。この、「同和教育」を受けていない部落外の子が、自分の力ではどうしようもないから、部落の青年が我慢して、自分の誇りもプライドも家族も生命も捨てて、殺されるかもわからんという時に会いに行って、我慢してそこで話を聞いてもらえた。初めから、「上から下」という具合で立場が大きく違います。対等ではないんです。

僕は、この話を聞いて、「しょうもないことを言うな」と思いました。でも、先輩達は、これを笑顔で話してくれるんです。笑顔で…、優しく話してくれるんです。僕は、その時にずっと思っていたんです。「二度とこんな思いはしたくない。二度とこんな思いを後輩にさせたくないから、この先輩は僕たちにこの話をしてくれたんだ。だから、僕は先輩と同じことはせん。」そう決めていました。でも、方法がないんです。親、親戚、兄弟が皆だめです。この状態では会いに行くしかありません。「教育長を連れて1回会いに行け」と言ってくれた人もあります。「ええっ…？」と思ったんですね。

でも、先輩達が「会いに行け」「会いに行け」と言う中で、僕は、「会いに行きたくないな。」「話をしに行きたくないな。」そう思いました。会えないからです。1%でも確率があるんだったら僕は何でもします。彼女のためになるんだったら何でもします。生命かけてでも何でもします。でも、やっても何の意味もないんです。これがわかっているところへ行きたくないんです。

僕は家に帰って、これまで一部始終を話していない僕の父親母親に話をしました。母親が訪ねてくるんです。「あんたな、なぜ相手の両親に早く挨拶にいかんの。」それは心配しますよね。自分の息子のことですから。僕はその時に初めて話をしました。「実はな、今、こうこう、こういう状況で皆に反対されているんじゃない。」するとね、うちの父親が言いましたよ。口数の少ない、おとなしい真面目な父親です。「今どき、こんなしょうもないことを言う人がいるんじゃないのう。わしは、今までに50人くらいの神山町の人と一緒に仕事をしたことがあるけど、こんなことを仕事場で言う人は一人もおらんのだわ。みんな、のどかなええ人じゃ。」

僕はその時、父親に言いました。「そうやな。俺はな、今、この時のためにな、今まで勉強してきたんや。人間って、自分の身に降りかかる時にな、牙をむくんだよ。仕事の時にはどんな人というのは関係ないよ。」父親は寂しそうな顔をします。状況を話していく中で、父親の顔が凍っていくのがわかります。

母親は僕がしゃべるのを聞いてこう言いました。「これはな、お父さんお母さんが反対するのは、娘を心配する思いで、娘を不幸にしたいくないっていう思いで、こうして反対するんだよ。」僕は、「それは違う」と言おうとしました。うちの父親が、僕がいう前に言いました。「それは違うわ」と…。うちの父親はわかります。勉強は、「同和教育」は受けていないけど、差別のことはわかります。

自分の娘の幸せを考えるんだったら、娘の話を聞いてあげて。自分の娘の幸せは、娘本人しかわからないんです。そうでしょう？夫婦でも、結婚していてもわからんことがある。彼女が一生懸命言っても、向こうはお父さん、お母さん、親戚、誰一人聞く耳を持っていません。

父親からの勧めで会いに行こうと思った時のお姉ちゃんからの返事

話が長くなりますがすみません。父親はしばらく考えて言いました。「とりあえず、おまえ会って来いや。」これは、僕のために言ったのではないと思います。一緒に隣にいた彼女のために言ったんだと思います。僕は、友だちや他の人が言っても会いに行こうとは思わなかった。うちの親父が言うから、「100%会えないと思うけど、父親の顔を立てて会いに行こうかな」と思いました。

彼女のお父さんお母さんをびっくりさせたらいけないので、彼女がお姉ちゃんに「明日、彼氏がお父さんお母さんにあいさつに行くかもわからんけど、びっくりせんといてよ」と連絡しました。お姉ちゃんから返事が返ってきました。

「①(家があるところがだいぶ山なんです)明日は雨が降って、帰りが道が凍るかもわからないから、だから明日はやめておいた方がいい。」優しい人だなと思いますね。

「②お父さんがかぜで寝込んでいるから、明日はやめといた方がいい。」ああ、そうやなあと思いますね。

「③いきなり会いに来るとするのは失礼と違うか？」

「④何曜日と何曜日はお兄ちゃんの子どもが遊びに来るから、この日は避けてな。」

僕は、どちらかという気は長い方です。

でも、「ふざけたことをぬかすな」って…。「いきなり会いに来るのは失礼」と言っているけれど、自分の親が、親戚が、僕の家族に対してどれだけ失礼なことをしているか。お姉ちゃんが言うのはこうでしょう。たとえば、僕本人が、お父さんお母さんに直接電話して、「お父さん、お母さん、いついつ会いに行きたいので時間をつくってくれますか？」と、事前に了解を取ってから来いということでしょう。

そんなことができるわけがないですよ。僕が「挨拶に行きます」と、初めからニコニコして言っているのに、それでも「会わん」と言っているんですよ。電話で事前の了解が取れるわけがありません。しょうもないことを言わないでください。僕は「もう、絶対に行かん」と思いました。なぜ行かなければならないんですか。僕は悪いことはしていないんです。僕の親も悪いことはしていません。

僕は、家に帰って父親に言いました。「今日、行く予定だったんだけど、姉ちゃんに会いに行きたいって言うことを言ったら、姉ちゃんがこう言った。」うちの父親のあんな顔を見るのは、一生のうちで最初で最後です。…こう言いましたよ。…「家族兄弟、親戚、皆反対だったらな。…もう、うちの家族と向こうの家族は付き合いはないと言え。それでも「結婚する」っていう意志があるんだったら、病気をしようが怪我をしようが、一生うちの娘として面倒を見てやるわ。ここに彼女を連れて来い。わしが言うたるわ。」

こう、鬼のような形相で言うんです。…僕は、…「父やんな、父やんが言うときついから、僕から彼女に言っとくわ」と言いました。…それを聞いた彼女は、「そんなことを言わずに1回会いに行つて…」そう言うんですよ。

会いに行くということは、この状況では、僕が頭を下げに行くということです。僕には絶対にできません。本当は12月24日にプロポーズがしてあるんです。「年明けくらいに幸せになるために結婚しよう」とプロポーズしました。でも、年明けになっても、彼女は「結婚はもう少し先にしたい」と言い出しました。僕は、彼女の思うようにさせておきました。

親がどうこうなんて関係ない。結婚というのは両性の合意に基づき成立するんですよ。自分が正しいことをしよるんですよ。彼女はお父さんやお母さんに一生懸命言うんですよ。僕の事を守るために言ってくれるんですよ。でも、話を聞いてくれないんです。

話をすること・一緒にいることから人は変わる

人間というのは変われます。100%変われます。人間というのは人と人が話をすることから変わるんです。一緒にいるから変わるんです。交流を絶つたら絶対に変わりません。成長がないんです。よく、みんなが「頑張り」「頑張り」と言ってくれますが、このケースは、笑顔で話をして、「お父さん、お母さんこうなんだよ。」こんな次元の問題ではないんです。

僕たちは「同和教育」を受けてきているんです。彼女もへたくそだけど「同和教育」を受けてきているんです。なぜ、頭を下げに行かなければならないんですか。なぜ20年、30年前の人と同じことをしなければならぬんですか。同じことをしたら、僕の後輩や、僕の子どもや孫に、また同じことを言わなければならないでしょう。

道徳の時間、同和教育の時間に子どもが下を向く。厳しい話をすることから下を向くのと違います。人間がしなくていいはずのことをするから、そういう話をすることから、部落の子は下を向くんです。僕が無理やり会いに行く方法もあります。会いに行った時に彼女は、最悪の結果を選ぶこととなります。必ず。

僕は、今、『部落の心を伝えたい』というシリーズの7本目のドキュメンタリービデオを撮影して、来年の2月頃に発売になります。僕たちの婚姻届を出しに行く様子も載っています。その時に、ビデオ製作の担当の監督さんとプロデューサーさんに僕の講演の内容を観てもらいたいから、お兄ちゃんに貸した講演のD

VDを、「返してもらえるかなあ」と言って彼女に頼みました。彼女がお兄ちゃんに連絡しました。「彼氏が講演のDVDがいるから返してくれないか」と。お兄ちゃん是这样言いました。「この前の掃除のときに捨てた。」

…漫画のビデオと違うんです。…彼女は泣きながら、電話口でお兄ちゃんと喧嘩をしています。電話を切ったら、僕に「ごめんよ！」と、何度も泣きながら叫びます。僕は、彼女にこう言いました。「謝らんでもええよ。僕は兄ちゃんに講演のビデオを貸した時に、戻ってくるとは思っていなかったから。もう、かまわないから気にするな。あのな、頑張るっていうのはな、無邪気に頑張るのと違う。話のできる人と話をしたらいいんだよ。話を聞いてくれない人と話したら自分がせこうなる。だから、自分の仲間を増やしていったらええのと違うか。自分が幸せになるために結婚したらええのと違うか。」

僕の誕生日に伝えてくれた彼女の決意…そして結婚へ

3月23日、僕の誕生日に、彼女はこのブライトニングの時計を桐の箱にのしを付けて僕のところに持って来て、(腕の時計をかざしながら)「私らは普通の人たちみたいに結納とか、結納返しとかはできんと思うけど、これが私の気持ちです。7月くらいに結婚しようと思う。」そう言いました。「それなら、親がどうこうは関係ない。付き合ってから1年目の日7月12日に結婚しよう」と言う僕に、彼女は13日にしてくれないかと言いました。「ああ、何か思い入れがあるのかな」と思い、「12日は何かまずい？」と聞くと、「12日は仏滅だから。」(笑い)

こうして、今、僕たちは結婚しているんですけど、彼女の親は娘が結婚していることを知らないんです。こんな不幸なことがありますか。僕は勉強していますから、まだ我慢ができます。お父さんお母さんは、娘が結婚していることを知らないんです。こんな不幸なことはありません。差別者は必ず最後に娘から縁を切られるんです。娘が正しいんですから。

僕は幸せになるために結婚しました。僕は、お父さんお母さんにいつでも会いに行く準備はできています。だってね、お父さんお母さんどちらか一人かけても、彼女は生まれていないんです。ここにいるみんな…。みんなは尊敬すべき人間ですよ。彼女も尊敬すべき人間、大事な人です。その彼女を生んでくれた親はもつと大事な存在です。でも、僕は人間の誇りまで捨てていくつもりはありません。いつか親が軟化して、僕がさわやかに挨拶に行ける時が来ると思っています。厳しい話をしましたが、今、僕の置かれている状況はこういう状況なので、皆さん方に聴いていただきました。すみません長くなりました。(拍手)

《コーディネーター A》

自分の娘と、自分の息子と重ねて、いろんな思いがあふれて涙がこぼれた人もいます。

行政職員の皆さん、教職員の皆さん。「人権教育」、「人権啓発」に頑張りましょう。人権教育推進の運動は何のためにあるのか。この、部落差別を放置していくということは、こんな切ない、こんな悲しいことはないです。本気で語り合え、地域社会の中で生き生きと、この問題が出し合えて、「こんな愚かな差別に振り回される」、そして、「一番大事なものを不幸にしていく」、「自らの魂までを傷つけていく」。そんな愚かな世界から解放されていく。そんな取り組みを頑張っていきたいと思います。

昨年、「徳島県人権教育研究大会」の青年活動で、いろんな思いを青年達がつないでくれました。結婚差別の現実もそうです。日常の暮らしの中で、いろんな切なさを味わいます。

この後、Dさんにしゃべってもらいますが、彼女は高校受験に失敗して、その高校受験のことで(Dさんより「失敗じゃない」声がかかります)ごめん、失敗じゃない。成功だ。

そういう、同じ立場の子ども達と出会ったときに、切ないことを言われるんですよ。本当に切ない思いの中で、切ないことを言われる。それを上手く切り返していい関係をつくっていく。マイナスをプラスに変えていく力があるなあと思います。人権教育の喜びというのは、僕はそこにあると思うんですよ。無茶苦茶楽

しい話をしてくれます。語りは「吉本新喜劇」です。皆さんすごく期待してください。盛大な拍手をお願いします。(拍手)

《パネラー D》

座ったままで失礼します。すごくプレッシャーはあるんですが、自己紹介がてら、私の生い立ちから話をさせていただきたいと思います。

高校受験に合格できなかったことと ~当時持っていた2つの夢~

今、A先生からお話があったんですけど、私は、今年12月で24歳になります。今から10年近く前になるんですが、高校受験にね…、私は失敗とは思っていません。人生においては成功だと思っていますが、合格できなかったんです。

私には当時、夢がありました。「学校の先生になりたい」という夢と、もう一つは「お笑い芸人になりたい」と思っていました。私自身が、小学校・中学校と学習会に参加して育ってきたので、世の中に「間違ったこと」とか、「おかしいなあ」と思うことがたくさんある。それを一度にさっさと変える方法はないだろうかと考えていました。無理な話なんですけど、「誰かがパッと言ったら、スパッと世の中変わらへんかな」という思いが、ずっとどこかであったもので、子どもの頃からその方法を考えていました。「テレビで明石家さんまあたりが一言言ってくれたら、世の中変わらないだろうか」とか、そんなことを考えていたんです。

でも、今、そんな人はいないから、「それなら私が…」みたいなことを思っていました。そこで、「歌手になろうか。モデルになろうか。女優になろうか」といろいろ考えていくわけです。(笑い)

ところが、周りの友だちから、「それは無理だろう」「これは無理だろう」と言われて、自分が「これだったらできるだろう」と思ったのがお笑い芸人だったんです。私はしゃべることも好きですし、人を笑わすことも好きですし、笑いの中で時間を過ごすということが好きなもので、これはいい方法だなと思いました。そんなことで、小学校の頃は「お笑い芸人になろう」と思いました。それから時間が経っていくわけですけど、実際は難しいですね。お笑い芸人になるということは…。今、うちの弟はミュージシャンを目指して大阪に行っているんですが、世の中の一握りの人しか成功できないシビアな世界です。

私のやる気に応じた成功が待っているかということ、そうでもないということで、うちの親も心配し、「それなら、教師の資格を取ってからお笑い芸人をめざしたら？」と言いました。お笑い芸人をめざすことに失敗しても、つぶしが効くようにということですね。親があまり言うので、「それならそうしようか」と、小学校、中学校と一生懸命勉強をして、受験に挑んでいくわけです。ところが受験に失敗します。自分自身は、あまり勉強をしていなかったもので、それほどショックではなかったけれど、親はとてもショックだったようで、私のいないところで泣いていたと弟から聞きました。

「学校の先生になりたい」という夢を叶えるためには、高校に行って、大学に行ってという方法が一番ですね。私は受験に失敗した時に、このままお笑い芸人になるために大阪に行こうと思いました。ところが、行ってから生活するお金であるとか、そういう現実的なことを考えた時に、「すぐに大阪に行っても、とても、とても難しいだろう。それなら、地元でお金を貯めて、それから大阪に行って」と思ったんですが、中学校卒業だけの15歳にアルバイトとなどはないんです。

高校への再チャレンジ ~予備校へ~

いろいろ調べるんですが、なかなか働くところもありません。お金を貯めるということも難しいし、それなら、もう1回高校に行ってみようか、高校受験をもう1回めざしてみようかという気持ちになり、親に相談をして、次の年の高校受験に再チャレンジすることになりました。

1年間勉強しないで受験をしても、また同じことになるかもしれないということで、私は勉強が本当に好

かんですが、次の受験に備えて、1年間予備校へ行ったらどうかということになりました。高校受験ための予備校というのは徳島市にあります。私はそこに入学しました。皆さんわかると思うんですが、その予備校に通ってくる子というのは、何らかの形で、その年に高校に行かれなかった子達ですね。私と同じように受験に失敗してしまった子、または、行きたい高校に行けなかった子達で、入学時点で、どの子にもきつともやもやしたものはあったと思うんです。

予備校の入校式の日に聞かされた ～女の子からの差別発言～

忘れもしません。その年の4月6日が入校式でした。そこで、私たちの学力を知りたいということで、予備校の校内テストのようなものがありました。私は、人と話することは好きですが、こう見えて、誰にでもすぐに溶け込んでいくというのは苦手なもので、お昼ご飯を1人で広げて食べようとしていたら、その時、20人位いた中の1人の女の子が、「一緒にお弁当を食べようよ」と誘ってくれたんです。

1人ぼっちで不安な気持ちもあり、すごく救われました。その頃の年頃ですから、男の子と女の子が別の部屋に別れて、私を含めて、女の子が7～8人いたと思うんです。一緒にお昼ご飯を食べていました。みんなが、「どこの中学校?」「どこを受けたの?」等、ワイワイとにぎやかだったんです。

そうしたら、私をご飯に誘ってくれた子が、「ちょっと聞いて…。私、お母さんから聞いたんやけど、同和の子って、受験せんでも受かるんだって…」と言うのを聞いて、「ええっ!?!」と思いました。「私、(高校入試)落ちているんだけど…」って…。その思いは喉のところで止まったんです。その子の話をそのまま聞いていたんですが、みんな、「へえっ!!」と言っていました。その子は、続けて、「面接で、私、同和地区出身ですと言ったら受かるらしいよ」と言うんです。

私はそれを聞きながら、「へえっ!?!忘れとった。同和地区ですって言えばよかったかな…。(笑い)」と思ったりしていました。

その後も話を聞いていたら、「お父さんのいない子、お母さんのいない子も、面接で片親しかいませんと言ったら受かるんだって…。そういう子が受かったから自分達が落ちたんだ。」その子がそう言った時に、周りの子が、「わあっ、腹立つなあ!同和の人ら、ムカつくわ。私も嘘でも同和地区出身ですって言えばよかったわ。」そんな話で10分から15分盛り上がるんです。私は、お弁当のアスパラガスを食べようとしていたんですが、手が止まって、「ああ、やられた!!」と思った瞬間だったんです。

経験された方もおられると思うんですが、こんな時、足の先から熱が上がってくるんです。「ここで何か言わないかん」という気持ちと、「黙っていなければわかってしまう」という気持ちが同時に起こるんです。

「これから1年間、この子らと過ごしていく時に、あえて自分から素っ裸になる必要はない。黙っておきなさい」という気持ちが、わずか1分2分の間かもしれないんですが、自分の中で闘うんですね。その闘いに、身体も熱くなるし、顔も赤くなるし、汗も出てくるし、その1分2分が、私にとっては、「どうしよう、どうしよう」って、10分20分に感じられる時間だったんです。「今は黙っていよう。今は我慢しよう」そう思ったら、今度は、その汗や熱を下げるのに一生懸命になって、それで、また熱が上がっていくんです。手がプルプル震えて、「早くみんな、ご飯が終わらないかな」と思いながら、お昼の時間が過ぎていくんです。

そして、家に帰って、「これから1年あの人らと過ごすのか」という気持ちと、どっと後悔の気持ちが沸いてくるんです。「何であの時に私は何も言わなかったんだ」と…。それまで9年間、学習会に通って、「差別というのはこういうものだ。部落の人はこういう辛い思いをしてきたんだ。それに負けないためにこういう勉強をしてきたんだ」と自分の中に自信がありました。いろんな勉強をしてきた。自分がそういう場に立たされた時に、「何を言ひよるんか」と一言でも二言でもいいから言い返せる自信もあった。それなのに、何も言えずに帰ってきたということが、ものすごい後悔で、1日2日は家で泣いて泣いて過ごしました。でも、「次のチャンスはある」と思いました。そういう人らと1年間過ごすのだから、少しずつ変えていくことができるだろうと思って、今回何も言えなかったけれど、それは悔しいけれど、また次のチャンスがある

わと思って、また次の日から予備校へ行くんですね。

言われたことは消えません。ただ、私が、今でも後悔しているところは、それを放っていたということで、その、話した子、聞いた子らの中では、「同和地区の子が受験に受かる」とか、「片親の子が受験に受かる」という間違っただけが常識になってしまっているんですね。

今から10年くらい前だったんですけど、私と年の変わらない14歳15歳の子が、まだそんなことを言っている時代だったんです。その「差別の芽」を摘むことができなかった責任は大きいかなと、今になって思っています。でも、私も14歳15歳でしたから、自分を守ることに必死でね。「少しずつでも変えていきたい」と思って予備校へ通うわけですが、その時の予備校の先生も良くなかったんです。

社会科の歴史の時間に、その当時は、私たちは、「士・農・工・商・エタ・非人」という身分制度を習っていました。その、「エタ・非人」というところを、コンコン！と、チョークで指差して、「この人らは、今で言う同和地区の人だ。わしの近所に肉屋さんがあったけれど、そこは同和地区の人がしていて…」と、いろいろ言うんです。その授業の後で、「同和」「同和」「部落」「部落」という言葉でその場が盛り上がるんです。そんな場で、「もうちょっと我慢しなければ」「もうちょっと我慢しなければ」という1年間だったんです。

予備校に行って、最初にお昼ご飯に誘ってくれた、「同和の子は受験に受かるんだ」と言った子を、少しずつでも変えていくことに専念しようと思いました。一生懸命友だちになっていって、家に連れて来たり、遊びに行ったりしていくんですが、普段の付き合いの中でも、いろいろなことを言うので、もう私の我慢の限界で、何も言えないまま、「この子とは、もう友だちでいられない」と思い、1年の終わりの頃には、話もしないような関係になっていました。

信じた別の女の子からの一言で、人が信じられないと感じた頃

その予備校で、別の子といろんな話ができるようになって、「この子とはいい友だちになれるな」と思い、「実は、予備校に入った時にこんな会話があったことは、私にとってとても辛かったんだ」という話を、その子にしたんですね。すると、その子は、「そうなんだ。うちら気づかなくてごめんよ。理沙は辛かったんやな」と言ってくれました。「ああ、1人仲間が増えた。それなら次の子を…」とあって、次の日に学校へ行くんです。すると、教室に入る前に中から会話が聞こえてくるんです。「理沙ちゃんて、同和地区の子やからね、これから理沙ちゃんの前ではそういう話はやめたほうがいい」と…。ありがたいことだとは思いましたが、「人は信じられないな」とも思いました。

そういう、「この子もだめだった。この子もだめだった」という中で、いろんな話もできて、私のこともわかってくれた友だちが1人だけできたんですが、最初にお昼ご飯に誘ってくれた子とか、一度信じて裏切られた子とは今は連絡もとっていないんです。ですから、その子らはまた別のところで、同じようなことを言っていると思います。その1年間通った予備校は、勉強は楽しくでき、2回目の高校受験に挑んで、見事にクリアーして、高校に入りました。

2004年度の学習会制度の廃止が残したもの

それから、いろいろな人権に関わる活動に出会って行って、今に至るわけですが、2004年度で、『学習会制度』というのが完全に失効しました。今でも、市町村によっては、いろいろな事業があるかもしれませんが、徳島市においては一切なくなってしまいました。

私自身、小学校・中学校と「学習会」に通い、今も被差別部落に生活をしているわけですが、仕事として、その『教育集会所』というところに勤めさせてもらっています。

勤めさせてもらうようになって、4年目か5年目になり、「学習会」がなくなっていくという激動の時間帯に、「学習会」に関ることができたんです。今も関わっているんですが、私自身が、「学習会」があったから、

予備校でそういう差別的なことを言われても、「次のチャンス」「次のチャンス」「次こそ」と思えたんです。

「学習会」がなくなるということは、私たちにとってとても恐ろしいことだと思えますし、その思いは地域の中にもあります。私たちの地域においては、「学習会制度が終わった後も同じような取り組みを」ということで、現在もやっています。「学習会」がなくなって、今が2年目ですが、「学習会」がなくなる前の4年、5年というのは、うちの地域においてはものすごく元気がなかったんです。私たちは、「差別に負けない力」とか、「仲間をつくっていく力」とかをしっかり「学習会」で身につけてきたという自覚があります。けれども、ここ4～5年のうちの地域の「学習会」で育ってきた子ども達に、その思いがあるのかと言えば、「？」マークなんです。

そういう子ども達を見てきて、その子らが、今、育って行っていますね。うちの地域に『若鮎会』という高校生友の会があって、「学習会」の延長、子ども会の延長で残ってくれているんですけど、その子らを集めてどう活動をしていくかというところで、私自身がストップしてしまっています。悩んでいるんです。「差別って何」聞いても応えの帰って来ない今の子どもたちと…

「差別って何なの」とか、「差別とはどういうものなのか」「差別が人をどうしてきたのか」そういうところの話というのは、学校ではなかなかしてもらえません。私は、「学習会」で先輩や地域の人話を聞いて、どこにあるかわからない、先に迫ってきているものに対して、準備をしていくということができたのですが、今の子ども達を見てみると、「差別って何ですか？」と問いかけても答えは返ってきません。「人権って何？」という問いかけには返ってきますが…。「人権って、自由だ」とか。「人権って人を大事にすることだ」とは返ってきますが…。

そんな中で、「差別をなくしていく活動」とか、「差別に対して負けない力をつける」とか、そういう仲間をつくっていく活動というのは難しくないですか？差別が何かわからない。差別を感じる力が弱ってきているというか、差別がどこにあるかわからない。そういう中での「差別をなくしていく取り組み」というのは、とても難しいものがあると思います。

それは、学校の道徳の時間だけ決まってみんながおとなしくなるとか、みんなが知らん顔をしているとか、おもしろくないという、それと同じことだと思えます。私自身も、学校での道徳の時間というのが嫌なものだったんですけど、「差別が、ある、あると言うけれど、ないじゃあないか。何をなくしていくんだ。」そういう思いもあるから、学校で道徳に時間が嫌いだという子が、部落の子らにも増えてきています。

今、「学習会」が終わって、子ども会をやっていますが、その子らを見ても、私らの時のように「ひしひしと差別を感じて、それに備えていく力をつけていく活動をしている」という自覚はないと思います。それは、それで良いことなんです。差別を感じなくてすみますから…。

私は、小学校・中学校でも、友だちなどからいろんなことを言われて、「差別が自分の身近にある」ということを感じる上で生きてきましたから、嫌でも、「差別に対する力」をつけておかなければならなかったんですね。でも、同じ地域の同級生を見ても、そんな思いをしている子はおりませんから…。そういう、差別を感じない中で暮らせるということが、本当に幸せなことだと思うんです。今、「学習会」がなくなっていますから、子どもらの世話をするという部分で、「こうしなさい」と教えてもできないんです。

若い子どもたちへおこなったアンケート調査

高校生達に協力してもらうことができないかなということで、今の高校生達、もしくは、私たちくらいの年代の子が、どういう生活をしていて、「部落問題」「人権問題」に対し、どんな意識を持っているのかという意識調査をしました。徳島県内全体の意識調査はできませんから、うちの集会所に、「高校生友の会」などで来ている若い子ども達を対象にアンケートをとりました。

やったものの、少しづつしか返ってきてなかったんですけど、結果は、私たちの時とは、はっきり違ってきています。そういう状況を目の当たりにした時に、私を含めた地元の青年や大人達と、「それなら、この子

ども達と、差別をなくしていく活動をどう進めていったらいいのかな」ということを悩みながら進めています。

そして、それなら、差別がどこにあるか。「ここにある」差別とはどういうものなのか。「こういうものだ」ということをまず知ってもらおうということになりました。そのためにどういう方法があるかということを考えてときに、県外の話でもいいのだけれど、今の子ども達は想像力が乏しいですから、ビビッと身体に電流が走るくらいに感じられることでなければだめだろうなと思いました。

差別のある事を子どもたちに伝えなければ私自身の生い立ちを「Aさんヒストリー」エッセーとして…

その時に、私の生い立ちを振り返った時に、「ここに差別があったな」ということを、「徳島県在住のAさんヒストリー」という形で、私の生い立ちや、なぜ私が今のようになったのかを含め、母親や、ばあちゃんのことを振り返りながら、エッセーように文章にまとめました。それを高校生友の会の子らに読ませるところから始めたんです。

今年、私が24歳、母親が45歳、ばあちゃんが70歳になります。うちの母親もばあちゃんも、高知県の被差別部落の出身です。父親は違うんです。今の、Cさんの話にあったようなことが、うちの父親と母親の間にもありましたが、私が被差別部落の出身であるというルーツは、母親とばあちゃんですから。ばあちゃんの歴史、私のルーツのようなものを辿っていった時に、差別が「ここにある」「ここにもある」ということ、それで、ばあちゃんがどうなってきた、母親がどうなってきた、私がどうなってきたということを書き文章にまとめました。それを使って高校生友の会で勉強をしてきました。

私のばあちゃんは70歳です。戦争が終わって61年ですから、戦争を知っている世代です。そして、読み書きができません。ばあちゃんは10何人の兄弟がいて、「衛生環境が悪い」、「貧乏」ということで、自分より上は、みんな、子どもの時に亡くなっているんです。そして、自分が一番上になって、下の子の面倒をみたり、家族の生計を背負っていかねばならなくて、小学校にも一切行かず、6歳7歳から父親の仕事を手伝って来ました。

ばあちゃんの父親は、山師をしていました。山師ってわかりますか？山で木を切って運んだりする仕事らしいんですが、ばあちゃんも一緒に山に上がって行って、木を切って、担いで運んでくるという仕事を、6歳7歳からやっていました。それから、土方のような仕事もしてきました。字を知りませんから、そういう仕事しかありませんね。

そんな中で、ばあちゃんは大人になって行って、うちの母親が生まれます。うちの母親は、学校に行くようになった頃、例えば、じいちゃん、ばあちゃんは風邪邪を引いても病院に行きません。字が書けませんから…。

母親は、小学校1年生や2年生の時に、平仮名しか読めないのに、学校を休んでじいちゃんやばあちゃんの手を引いて病院に連れて行き、「ここが受付」「ここが診察室」ということを教えます。名前は母親が書きます。そういう環境が母親の時代にありました。こういう話を、母親やばあちゃんから直接聞いたことはないんですが、今のばあちゃんを見ていたらわかる気がするんです。

そういう苦勞が想像できますか？小学校1年生や2年生の子が親を連れて病院へ行くことって情けないですね。うちの母親は、そういう自分の親に対し、「恥ずかしい親だ」「甲斐性なしの親だ」と罵声を浴びせていた少女時代を過ごします。

私の母親も、高校生になって、高知県で「高校生友の会」を立ち上げていくんです。そこで、「ああ、親が読み書きができないような状況に置かれていたのは、そこに差別があったんだ。サボって学校に行かなかったわけではない。仕事に行かなかったわけではない」と気づいていくんです。そこから、親を、「いとおい」「そういう中でも一生懸命生きてきた親じゃないか」と思えるようになります。

そして、保育師を目指して、徳島の大学へ来て、うちの父親と出逢い結婚します。そして、私が生まれま

すが、母親は字の読み書きのできない自分の親を高知県に残していることが心配ですし、共働きをしていますが、私の面倒をみるということの名目にして、高知県から両親を呼び寄せます。

じいちゃん、ばあちゃんにとって、長年暮らしたところを去って、知らないところで暮らすということはためらうと思うんですが、スッと来るんです。それは、娘がいなければ暮らしていけないほどの生活が、じいちゃん、ばあちゃんにあったからではないかなと思うんです。

今は、私が車の運転もできるし、字の読み書きもできるし、じいちゃん、ばあちゃんを病院に連れて行ったりしています。今は、エレベーターも記号で書かれていますから、覚えてたらわかると思うんですが、字の読み書きができない生活を長く強いられてきた人生というものは、そういう人生なんですね。私たちが普通に「エレベーターに乗る」「エスカレーターに乗る」「買い物に行く」そういう生活すべてに対して、どこか不安なんです。

ばあちゃんは、小さい時から土方ばかりやってきて、足腰が悪くてリハビリをしているんですが、病院に連れて行ってから1時間、2時間、かかるんですね。仕事の途中などでは、それを待っていただけませんから、私の携帯電話の番号を看護師さんにも渡して、ばあちゃんにも渡して、「終わったら、電話をしてもらって…。」そう言って仕事に戻ります。そうして、気がついたら、ばあちゃんが歩いて帰ってきているんです。「終わったら電話したら迎えに来る」と言っているけど、それを頼むことができないんです。

そういうことのできない生活、人生を送ってきている人が近くにいるんです。ここまで詳しくは書いていないんですが、こういうことを文章にして読んでもらい、今、「差別ってこういうものなんだ」ということを、若い子らに想像してもらおう取り組みをしている最中なんです。

「この人が字を書けないのは、こういうことなんだなあ」とか、「これって差別なのかな…」とか、チョコチョコ返ってくるようになりました。「私のこと」と言って話をすると、身近過ぎて、なあなあになってはいけないので、「市内のAさん」ということにしています。

私のことを紹介させていただきましたが、私の一番言いたいことは、法律ができて何十年も経っています。私は、学校にも行っていますし、仕事にも就いています。ばあちゃんの時ほどの悲惨さはなくなっていますが、ばあちゃんから私まで、何十年という年月が経っているにもかかわらず、「差別がある」という現実については、何一つ変わっていないんです。そういうことを、どう子ども達に伝えていくかということが、私の今の課題です。ということで、後はよろしくお願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

会場の皆さん、ズッシリと、Dさんの願いや思いを受け止めていただけたと思います。本気で啓発していく。本気でつながっていく。人間が人間として幸せになっていく。そんな、あたりまえの価値観が共有できていく学校でありたいし、職場でありたいし、地域社会でありたいと思います。

ここで10分間休憩を取らせてもらいます。帰らんようにしてくださいね。

ちょっと、隣の人と「10分間休憩になりますけど、帰らんようにしましょうね」と声を掛け合ってください。後半はフロアの皆さんとやり取りしながら、いっぱい楽しみたいと思います。

前半終了

=意見交換=

《コーディネーター A》

参加した一人一人が、自分というものを見つめ、そして、一人一人の生活の中にある課題、現実を、決してあきらめることなく、そのままに放置することなく、問題解決の確かな営みをつくっていく、そんな今日の「人権地域フォーラム」であつたらなと思います。

本当に切ない、厳しい現実が訴えられました。私は中学生と、自己を見つめ語る、そして、つながる学習

の中で、中学生の精いっぱいの生活、精いっぱいの想いや差別の事実に触れる中で、いっぱい涙を流したことがあります。

ある男の子がこう言いました。「僕は、いつかお母ちゃんの方のおじいちゃん、おばあちゃんに会いたい。そして、会って、今僕がこんなに幸せになつとる、僕がこんなに頑張っている姿を見て欲しいし、僕の話聞いて欲しい。先生、僕のお母ちゃんは、結婚して以来一度もお母ちゃんの家に戻っていないよ。」

そんな、仲間の思いや現実に出会った子ども達は、やっぱり、本気でこの問題を考えます。今日、この会場に集まっておいでた皆さん。これまでの営みを共に検証しながら、それぞれの市や町において、愚かな差別に振り回されている、そんな愚かな現実が克服されていく取り組みをつくっていくために、後の時間をフロアからの皆さんの意見をもらって、パネラーの3人に最後をまとめてもらいたいと思います。

時間が限られていますので、長くしゃべられたら、すごく辛いものがあります。(笑い)なるべく多くの人の想いに出会いたいと思います。挙手をしてくれたらうれしいなと思います。はい。マイクをお願いします。

《フロア 男性》

藍住町から来ております。板野町の教育委員会に勤めております。今日はどうしても言わなければいけないと思って、真っ先にA先生に言いました。

神山町出身です。Cさんの話にありました兄ちゃんの、中学3年生の時の担任です。その兄ちゃんを3年生で教えている時に、私はその子に非常に助けてもらいました。学級のことでも助けてもらいました。

非常に自分的に信頼をしておったのですけれども、2月にA先生から話を聞いていたのですが、非常にショックだったし、自分自身の力のなさというか、自分が、今回のフォーラムのテーマに掲げてある、「ひとつごと」から「わがこと」になっていなかったような、辛い複雑な思いで今日話を聞かせてもらいました。

まずはそのことで、自分自身が同和教育をきちんとできていなかった。非常に反省しておりますし、2月時点で、その時の状況で動かなければならなかった時に、動けなかったということに反省しております。

もう、反省ばかりなんですけれども、やはり自分自身の力のなさというのを感じて、これから自分はどうのようにして取り組んでいかなければいけないかということ、非常に考えさせられました。以上です。

《コーディネーター A》

ありがとうございました。どうでしょうか。はい、どうぞ。

《フロア S》

すみません。鳥取県から来させていただきました。短時間で終わりたいと思います。

今日、どうしても皆さんにお伝えしたいなあと思ったのは、私には、被差別部落に住みながら、今年の3月に癌と脳梗塞の闘いの末に亡くなった親友がおります。その親友は、地域の中で、本当に運動のなかったところを、女性部の活動をたたき上げたり、地域の子どもたちに自分の思いを届けながら、解放運動、差別との闘いの中で人生を送りました。

「どうしてもこの思いを多くの人に伝えたい」と言いながら、最後、伝え切れなくて、「私の思いをよく知っているあなたが、私の思いを『人生史』に残してほしい」と遺言されて、今、80ページの彼女の『人生史』を作成しようとしています。

私は今、小さい地域ですが同推協の会長をしています。その地域の中で何を進めていくかという時に、やはり、部落外の私たちが、いろいろなしがらみの中から少しずつ解放されていきながら、「人」を「人」として認め合えるような学習の場づくり。どこに住んでいても、その人、その人にとって、そこに「安心」があるかということへの振り返りを学習の場につくっていく必要があるなということ強く感じています。

私は今、同和教育と17年関わってきました。私の中で一番何が良かったか。自分の娘が混住地域の相手と

結婚した時に、うちの連れ合いと共に、もしも、部落の人であったとしても、自分の娘がこれだけ幸せそうな顔をしている。喜んでいる。そして、その相手の家庭の中に、自分の娘の安心の場があると気づいたときに、そのことを中心として見られる親であったことが、私たち夫婦の誇りだと思っています。

「何かがあった時に私たちが対応できる、それだけの覚悟を持っていたらいい」と言い切れた夫婦でありえたことが、同和教育を続けてきた成果だったと思います。自分が娘たちの幸せを第一に考えていたことが、同和教育を続けてきた成果だったと思っています。他人のための学習ではない。自分が幸せになり、子どもが幸せになり、そして、一人一人が安心して暮らしていける地域を広げていく。そのことができるのが、人権教育・同和教育なのだなということを強く思います。

皆さん、私は、自分が幸せになるために、自分の子どもの幸せを認める親であるために、同和教育を続けていきたいと思っています。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。人として、人への共感。そんな喜びをつかんでいくこれからの時間にしましょう。いろんな思いを返してくれたらうれしいです。はい。お願いします。

《フロア 中学生》

愛媛県から来ました。上手くは言えないと思うんですけど、私たちの地区では、去年の4月から、「解放未来塾」というものできています。

同じ地区の人たちとたくさんの勉強をしてきて、「大島青松園」で元ハンセン病患者の方との交流をしたり、たくさんの勉強をしていく中で、私は、人の前から発言するのが苦手で、それを、去年の愛南町であった「人権ふぉーらむ」まで引きずってきていて、そこで、1人の先生が、同和地区の存在をみんなに伝えてくれて、それで、「見えない差別」が「見える差別」になって、それで、私も自分の気持ちを伝えようと発表することができて、自分自身の心が解放されたように思いました。

その時から、同和問題についていろいろな人権学習を続けていこうと思って、今日も来させてもらって、自分のためになる大切な時間だったと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

愛南町というこの町が、町を挙げて、「人権ふぉーらむ」を3年続けてやりました。地区があります。でも、ないことになっていました。ないことにしていたら、差別を受けても、差別を受けなかったことになっています。人間がボロボロになったり、ズタズタになります。それでも、我慢、我慢の人生です。

C君は、出会いの中で、運動の中で、闘える自分をつくってきました。歩き続けていくしかないんです。子ども達がつくった「解放未来塾」という取り組みが、地域を変えました。500人、600人の住民が参加する「人権ふぉーらむ」の中で、高校生、中学生が語ります。青年が語ります。そのやり取りが町を変えていきます。地域社会を変えていきます。

まさに、人間が人間としての誇りを持って生きる人権のまちづくりになっていくんです。はい。では、お願いします。

《フロア 男性》

失礼します。北島町から来ました。今日は、3人のパネラーの方から、差別の実態について、いろいろお話をさせていただいたところですが、とりわけ、C先生からは、差別の現実を、まざまざとお話いただきまして、私も聞いておっても苦しくなるほどの思いがございました。しかし、それは、差別が現存しておるからでございます。私共として、深く受け止めさせていただきました。

また、D先生のお話の中で、「おばあさんがエレベーターのボタンも押せない」あるいは、「病院で出迎えるの電話さえ頼めない」これは、私はやはり、「それだけ差別が厳しかった。その結果ではないかな」と、私なりに解釈しているわけでございます。

特に、A先生からは、「人と人とのつながりが大事」とか、「こんな社会から早く解放されたい」とか、こういう提言をいただいておりますから、私共の町でも、まもなく9月から地区懇談会を始めるわけでございます。

しかし、もう、30何年続いているわけでございますが、考えてみましたら、「人集め」、「人集め」と、それで終わってしまっているのではないかな。そういう反省もしております。「人集め」も大事でございますが、それから1歩、町民が高らかに人権を語り合う、それが私共の願いでございます。

先般の「四国人権・同和教育研究大会」で、愛媛県の方がそのことについて発表していたんでございますが、『人集め』、『人集め』で成果が…」ということをお話しておりましたが、「人集め」、それも大事なことなんです、どうしたら町の参加している方々、あるいは町民の方々の意識を変革できるかなあと、そこらをお尋ねしたいと質問をしたんですけども、なかなか、そこに答えは出てまいりません。

我々は、啓発活動をやっておりますも、何か一つ、落としているものや核になるものができていないのではないかなと、こんな気もしている現在でございます。

本年度、お願いしましたことは、「差別をしてはいけない」ではなく、私たちがやはり偏見を持った人間であるし、差別意識も持った人間です。その、私たちがどのように変わっていくか。「こんなことはやってはいけない」という、「いけないこと」でも、私は言うて欲しいと思います。そのところを町民の方に伝えて、そして、町民のお方と、話を進めながら、そのことを一つ一つ解明していきたいなあと、推進者の方々と話し合ったのでございます。

差別を受けた方々のこの思いを、どうのように自分の地元伝えていったらいいかなと考えております。まだ、日もございますので、これを自分のものとして伝えていきたいなあと考えております。どうも今日はありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございました。込み上げる思い、震える思いを言葉にしましょう。確かな自分をつくっていく。そんな時間になったらうれしいです。挙手してください。マイクを前から3列目をお願いします。

《フロア M》

今のお話をお聞きして思ったのですが、「このフォーラムは『人集め』ではないな」と感じたので、昨年引き続き、滋賀県から寄せていただきました。

私の勤めている地域でも、いろいろな人権に関わるこのような催しはありますけれども、まだまだ、「中身」ということを考えた時に、一度参加していただいた方が、自分の人間性を高めるために、さらにもう一度このような場に参加したいという、そういうつながりというのはまだまだありません。

それを、このフォーラムで感じさせていただいております。「ひとごと」から「わがこと」へ、そして、日々の生活の場で実践していけるような自分でありたいと、その自分をめざしたいと思います。以上です。(拍手)

《コーディネーター A》

どうも、ありがとうございました。

《フロア 高校生》

場違いみたいな気持ちになったんですけど、高校生です。いっぱいいっぱい発言したいことがあって、先生からも、「おまえ、会場が黙ったら挙手せえよ」と言われていたのに、いっぱいいっぱい意見が出て、でも、「中学生集会」とか、交流会とか、「高校生集会」と変わらんのは、「寝ている人がおるかな」みたいなところですよ。ここではそんな人はないと先生は言っていたけど、「あるやん」と思いました。

私は、県の高校生集会の実行委員長をしました。(照れたように笑いながら)それは、私の中の自慢であって、ここでも、「あの人が来てる」「あの人も来てる」と思って、私しか面識がなかった人も、知り合いみたいになりました。

私は人権の活動をしてきて、いっぱいいっぱい仲間ができて、「中学生集会」、「高校生集会」にも行けるし、小学校・中学校からの活動でも、いっぱいいっぱい知り合いができました。その人らと、共に話ができるし、1回親友と話をしたら、親友から違うことが返って来て、それをおかしいなと思ったりしたけど直していけました。

自分は、「こういう会で発言できてナンボ」と思っているのだから、「寝るな」ということも言いたいし、さっき言っていた人があったけど、「人集め」ではないと思うけど、でも、人が集まらなければ団結できんから、人を集めて、寝させないで考えさせるのが目標です！自分で言っている意味がわからんけど、終わります。(笑い拍手)

《コーディネーター A》

はい、ありがとうございます。じゃあ、お願いします。

《フロア F》

失礼します。昨年度も私の友だち、先ほど発表したSさんがパネラーとして上がってしまっていて、その応援で来ていただきました。そして、すごくいい思いをさせてもらって、今年もあるというということで、また一緒に来てさせていただきました。

今朝、4時に起きて、4時55分の汽車に乗って出発しました。(パネラーの、感謝を込めて頭を下げる場面あり)その時に私の夫が、駅まで送ってくれました。「行って来いよ」と言ってくれました。出かけて来て、「去年も良かったよな」と思って、先生方の話を聞きながら、「来て良かったなあ」と思いました。「ここに来れた自分の身がうれしい」「こんな中に生きられる私がうれしい」と思いました。

皆さんの話を聞きながら、私も被差別部落に生まれて、「仲間だよなあ」と、すごく温かいものを感じました。そして、そこの中で子どもが生まれるという時に、「ああ…、部落の子どもを産む…」と思った私がありました。

子どもが生まれて、ずっと、同和教育の中で子どもと一緒に学んできて、今、「ここに生まれてよかったなあ」そして、A先生とか、C先生とか、たくさんの素晴らしい方たち、そして、仲間として佐伯さんもいたりという中で、私は、今、「ああ！このムラに生まれてよかったなあ！」と思えるようになりました。

ここに生まれていなかったら、私は多分、「ああ、あの人たちのことか」と思って家でごろんと横になっていたかもしれない。周りで苦しむ子どもがあっても、「ああ、あそこの子どもか」で終わっていたかもしれない。

でも、私は今、「ここに生まれた」という中で、「全国のどこに生まれても、被差別部落の人は仲間だよなあ」そういった思いで生きられる。そして、「ムラの子どもが」、「ムラの人たちが」と考えられる自分を本当にうれしいなあと思います。そして、人が苦しむという時に、「私には何ができるの?」と寄り添いたい。こんな自分であり続けたいなあということを思いました。

パネラーの皆さんの発言を聞きながら、「この皆さんを、みんな鳥取県の琴浦町に来てもらえたらどんなにいいだろう。」と、今日、本当につくづく思いました。それで、帰って言うと、「お金がない」と言われ

るのはわかっているんですが、本当に強く「来て欲しい」を思っています。

「こんなフォーラムができれば、『部落の者はなあ…』と思っている人が、『ちょっと違うよなあ、自分らも仲間であった方がええなあ』とってくれるな」と思いながら、また来年も来させてもらわなければと、こんな無理なことを思いながら座らせてもらっていました。

そして、「皆さんとまた会いたいなあ」という思いで私の話を終わります。今日は本当に参加させていただいて、ありがとうございました。

《コーディネーター A》

人権教育のよろこびは、出会いとつながりです。そのよろこびをかみしめながら、いろんな思いを共有できたらうれしいです。いかがでしょうか。はい。じゃあ、お願いします。

《フロア M》

失礼します。先ほどから話題が上がっています、愛媛県の愛南町から来ました。昨年に引き続き2回目なんですけれども、去年は1人できたんですが、今年は、今、発表しました、『解放未来塾』という解放子ども会の中学生と小学生を1人ずつ連れて来ました。

高校生も連れて来ようかと思ったんですけど、今日は始業式ということで、参加ができません。先ほど、中学生の本人も話をしたんですけど、昨年2月に解放子ども会、「解放未来塾」というのを立ち上げて、この1年5ヶ月余り学習を進めてきました。

今話をしてくれた中学生は、昨年、開校式直後には、10数人の子ども会の中で、本当に近くの子どもの前でも、かしまった場所ではなかなか発表できない。自分の考えを発言できないという、すごい恥ずかしがり屋で、人前で話をするのは本当に大嫌いな子でした。

ところが、1年5ヶ月の間に、「今年の自分の目標として、自分の考えを人前ではっきり言えるようになることです。」と言って活動してきました。今日、ここで、「こういう場所ですぐに手を挙げて自分の考えを発表できるようになったのか」という驚きと、「すごいな」と思いました。このまま帰ってしまうと、私は何か言われそうなので、(笑い)どうしても、何かしゃべらないかなと思いました。

A先生からもありましたが、愛南町では地区のあることを隠して、隠してというよりも、愛媛県の方針もそうなんです、「同和地区を表に出さない。」部落問題はあるけれども、部落差別はあるけれども、同和地区がどこにあるのかということは明かさずに同和教育をしていこうという、本当にちぐはぐな、部落外から見ればそれでいいのかもしれないかもしれませんが、私たち部落の中におる者としては、「ここに部落があるじゃないか。」「差別されている人がここにおるじゃないか。」「何で黙っているんだ。」そんなイライラするような、腹の立つような取り組みをやってきました。

これまでも、「解放子ども会」というものを立ち上げをしようとするんですが、なかなか形になりませんでした。昨年1月に周りの状況が固まりましたので、立ち上げました。

今年の2月に「愛南町人権ふおーらむ」というのをやりました。1年間学習をしてきて、その中で、今のよう子ども達が、「私たちの住んでいるところは部落です」と…。「同和地区です」と…。「そこで人権学習をしている子ども会があります」と言って、なおかつ、「私たちと一緒に勉強しませんか」と訴えました。

それで広がりがあるのかなと思うと、あちこちから反発の声が出ました。やはり、「どうして地区を明らかにするのか」とか、「君たちは、子ども達にみんなの前で、立場宣言をさせるために子ども会活動をしているのか」というふうな声が出ました。教育委員会では、あるえらい人が、教育委員さんに「愛南町では、立場宣言をしない、させない同和教育をします」ということを言ったということです。

そういう、非常に厳しい状況ではあるんですが、子ども会活動とか、学習会活動とか、どんどん、どんどん、下火になって消えていく状況の中なんです、昨年私たちはそういう状況の中で、子ども会活動を立ち

上げました。でも、こうして、堂々と人前で自分の考えの言える子ども達が育つようになってきました。このことは私たちの誇りにしたいし、これからも、どんどん、どんどん、広げていきたいと思います。

先ほどDさんの方から、高校生とどういうふうにしていったらいいのかなという発言もあったんですが、1人2人、その中で「絶対にやるんや」と、「どんなことがあってもやるんや」と、意気込みを持った人があれば、どんどん、どんどん、周りからつながってくると思います。

私たちも、A先生やC先生と一緒に交流できて、四国の東の端と西の端なんですけど、「距離なんか関係ない」というつながりができました。だから、ここで「人権フォーラム」があるということは、来るのは当然だという考えで来ました。これからも距離的なことはありますけど、いろんな人とつながっていききたいと思います。ありがとうございました。

《コーディネーター A》

ありがとうございました。後2人くらいお話をいただいて、パネラーに返したいと思います。どうでしょうか。はい、じゃあ、いきましょう。

《フロア S》

こんにちは。私はあまり話すのが上手ではないので、Cさんのように話せません。私も、小・中・高校と学習会に通って勉強してきました。Dさんが言っていた様に、自分に自信を持っていると思います。というのは、私は実際に差別にあった経験がないからだと思うんですけど、自分は差別に負けないし、差別にあっても大丈夫。高校に入っても怖くないと思っていたし、自分は結婚差別にあっても頑張れると自信を持っていました。

今、大学4年になるんですけど、大学4年生になって人権問題を扱う授業がありました。1年生の時から、4年生にこういう授業があるということは、カリキュラムの中で知っていたので、それが選択になっても必須になっても、私は「絶対にこの授業を受ける」と思っていました。授業がないなあと思っていたら、4年の前期、この前、その授業がやっと出てきました。

その授業が「社会〇〇とか」という教科名で、中身がわからなくて、授業に出て初めて、「この授業ではこんな勉強をします」と言われて、教科書を配られたり資料を配られたりして、初めて「ああ、この授業は人権問題を扱う授業なんだ」と気づいて、楽しみにしていたこの授業がやっと来たと思ったんです。

でも、実際その授業に出たら、自分が下を向いてしまいました。…大学なので、いろいろな県から人が集まっているんですね。だから、みんながどんな勉強を受けているのかもわからないし、大学に3年半通ってすごく仲良くなった友だちが両隣にいるんですけど、…その両隣の友だちの顔も見られなかったんです。

その教科書は、いろいろな人権問題も書いてあって、同和問題も書いてあったんです。差別の事例とか、結婚差別とか、学校現場の教育のこととか書いてあったので、そういうものは読むのが好きというか、すごく興味があるので、下を向きながら教科書を読み続けたけれど、…先生の顔も見られないし、友だちの顔も見られないしという状況で授業を何回か受けました。

…いろいろな県から来ていて、みんなの状況がわからないので、先生が、みんなに振るんですね。「何々さんは何県から来たんですか?」「どんな勉強を受けたんですか?」「教科書無償問題とか、狭山事件とか知っていますか?」と、いろいろな人権問題を出して、振るんですけど、私は自分に当てられなくて…。

…もちろん、…これまでいっぱい勉強してきたから知っているし、でも、適当にみんなにはわからないようにして、「知っています。学校で勉強していました」と言って適当に済ませればいいけど、それは…私は嫌だし、自分にうそはつけない。

私は、高校で解放研究会の活動もしてきたし、これまでいろいろ勉強をしてきたことは、自分の誇りだし、自分の力だと思っています。…それは、みんなには言いたいけど、言いたいけど、言えない。…だから、当

てられたくないということがあって、ずっと下を向いていました。

…今まで、自分に自信をもって過ごしてきたのに、自分が初めて自分の弱いことに気づいたというか、それが自分ではすごく悔しくて。…その授業はすごく楽しみなんだけど、怖くて…。

…毎回…授業が終わるたびに、友だちに電話して、「どうしよう…。どうしよう…私はどういうふうに授業を受けたらいいかわからない」と言っていました。授業を受けるからにはちゃんとしたいし、当てられたら、ちゃんと発表もしたいし、…でも、…周りの友だちの発言とか授業態度とか、気配で感じるんですよ。それを感じるから、前を向くのがよけい怖くて…。

…結局、その授業で私が当てられたのは1回で、「どうですか？こういう事件を知っていますか？」と聞かれて、「はい、知っています。」「どこで習ったんですか？」「はい、学校で。」「あ、そう…。」それで終わったので、私の当てられたのはそれだけしか発表をしてないんです。

…この会に来たら、私はしゃべりたくてうずうずしてしまうんですけど、今も、しゃべりたいと思って、しゃべるのが上手ではないから頭の中ですごく整理をして、しゃべりたいと思った時の熱い感情とか、切ないような胸が苦しくなる感情がすごく好きなんです。

「しゃべりたい」とうずうずしてくると、「あ、来た来た」と思う時がすごく好きなんです。周りの人に、「たくさんの方の前でしゃべるのはすごいね」と言われるんですけど、…でも、…私は、ここでしかしゃべれていないんです。学校だと話ができなくて…。

…ここだと…先生とか、最近、この(前の)あたりに座っているような仲間も増えてきたので、味方になる人とか、後、…全然知らないたくさんの方でも、受け入れてもらえるということがわかったら、しゃべれるんです。

…学校ではしゃべれなくて。…これまで勉強をしてきたのに、どうしたら強くなれるんだろうと思って、…その授業は、そのまま、友だちとも自分のことを明かすような深い話はせず、…今は前期があけて、もうその授業は終わってしまったんですよ。

私も大学4年なので、後、後期の半年しかないんです。みんなには話ができないだろうと思うんですが、私の両隣にいた、大学を卒業してもずっとつながり続けたいと思う友だちには、卒業までには全部言いたいなと思っています。

あと半年、希望を強く持って頑張りたいと思います。すみません。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

会場の皆さんのまなざしが、会場の皆さんの涙が、会場の皆さんの笑顔が、彼女を押していきます。そんな人間のつながりを、家族の中で、地域社会の中で、職場でつくっていきたくと思います。

ごめんなさい。本当にいっぱい思いをいただきたく思うんですけど、この前の3人がやかましいので、3人にまとめてもらいたくと思います。

アンケート用紙を配らせていただきました。シャープペンシルが入っていました。封をしたまま持って帰らないでくださいよ。封を開けて、ちゃんとアンケートを書くために入っています。皆さんの率直な思いをアンケート用紙にいっぱい書いてください。

じゃあ、3人でまとめてしてもらいます。はい、お願いします。

《パネラー B》

初めに発言をさせていただいた時に、「後の2人が濃いんです」と言ったと思うんですが、覚えていますでしょうか。その言葉すら、消えてしまっているのではないかと思います。(笑い)濃いでしょう？

うちでも、地域別懇談会というのをしていたんですが、そこで、保護者の方にこう言われたんです。「うちの応神中学校は、人権学習に熱心だから」と…。この言葉が何か引っかかっています。「人権学習に熱心

だから…。」

僕は普通にやっているつもりです。もしも、熱心にやっているように思えるのであれば、よほど他のところがやってないのかなあと思うんです。他のところは何をしているだろうと…。日常的に、僕らは差別意識のようなものを空気のように吸いながら生活しているような気がするんです。それは、例えば、部落差別だけの問題ではなくて、いろんな差別意識を吸いながら生活をしているような気がしているんです。となれば、逆にその差別に対抗する空気をつくっていかないと、バランスが取れないと僕は思っています。だから、人権学習を熱心にやっているのではなくて、やるのが普通でしょう。

(応神中学校の昨年の授業実践記録『マイ スカイ』を手にしながら)これは、今年3月に卒業したうちの学校の子も達の、去年1年間の授業の記録なんです。授業の意見交換をそっくりそのままテープ起こしをしました。劇もしましたから、劇のシナリオも入れました。学年だよりもつくっていたので、学年だよりも入れました。

卒業した子ども達にすれば、この本は自分と同一な物、いとおいしい物のような感覚で、僕たちも受け取っていたし、子ども達も受け取っていたと思うんです。

4月の10日に、進学した先の高校で、懐かしそうにこの冊子を広げて読んでいたうちの卒業生に向けられた言葉です。「何?それ?」「中学校のときの取り組みでな。」「どんなことが載っとな?」「部落問題学習とか載っとなよ。」次の瞬間に出てきた言葉が、「部落って死んだらええのになあ。」これが4月の初めの言葉です。

聞いて、「ええっ!!?」と思ったんですよ。隣にいた友だちも、「おまえ、何を言いよん」と言い返しています。報告があって、高校と連携しながら、どうやってその子を変えていくかということ始めていったんです。僕らにすれば、本当に生命の生き写しのような冊子です。

僕は、この会の最初に嘘を言っていました。本当はこちらの2人は20代。僕は40代。あ、わかっていました? (笑い)でもね、若者にバトンを渡していきたいと思うんですよ。60代の頑張られた方は50代に、50代の頑張られた方は40代に…。僕らが30代、20代に…。そして中学生、小学生にきちっとバトンを渡していきたいと思うんですよ。それが僕にとっての一番のよろこびです。

《パネラー D》

先ほどお話した中に、私の父親と母親が結婚をする際に壮絶な闘いがあったとお話しましたが、父の出身地は愛媛県の愛南町なんです。(会場より「あれ!」笑い)ものすごい反対をされたみたいですが、父は家を出る覚悟で結婚したんです。

母の人間性とか、2人の幸せそうな様子とかを見ているうちに、私のじいちゃん、ばあちゃんに当たるんですが、今は、お盆と正月に、私らも愛南町に帰って、じいちゃん、ばあちゃんに会えるという関係になっています。(愛南町からの参加者に向かって)という話を先ず、言いたかったんです。

それから、さっき発言してくれた彼女の、大学の時の話しやったんですが、ものすごい気持ちはわかるんです。私も、こういう風に、差別と闘っている自分を見てもらっている裏でね、いろんな人間関係の中で、我慢をしている生活をしています。

子ども達に、差別はいけないことなんだ。差別に負けるなど言いながら、自分が予備校の時と何にも変わっていませんね。「部落の人間ということがばれないようにこらえよう」とか、「今は我慢しておこう」とか、「この次は…」そういう思いがずっと続いています。でも、それは悪いことではないと思うんです。

私も、自分をかばうわけではないですけど、自分の生活とか、人間関係などを考えていったときに、その場で、真っ直ぐに向かっていくことが正しいというか、そうしなければいけないことではあるんですが、そこでぐっと我慢して、次に立ち向かっていく力というものをつけてもらえる人とか、場所というものをつくっていく取り組みも大事ではないかなと思います。

私にとって、予備校でそういう嫌なことがあった時に、「明日会ったら『私は部落の者だ』と言ってやるわ」毎日、そう思って通いましたが、1年間経っても言えませんでした。

今も付き合いがある人が、会う度会う度のように、「徳島に交通手段が整っていないのは、川と『同和』が多いせいだ」とか、私が部落の人間だということを知ってか知らずか、どうしてそういうことを言うのかわかりませんが、50歳を越えたおじさんが、聞くに堪えないことを平気で言います。その時に、「おじさん何を言っているんですか」と、いつも言いたいです。でも言えません。付き合いがこれで切れるという時にははっきり言おうと思っていますが、今は言えません。

それは、いろいろな人間関係がありますから、仕事であったり、先輩であったり後輩であったり、友だちであったり、恋愛関係でもそうだと思いますが、その場では黙って、その次にそこに立って行く力を付けていく取り組みというの、頑張っていきたいなと思っています。

逃げていただけかもしれませんが、気持ちは、部落問題に負けない力を付けていくというところに向いていますし、私は小学校、中学校の時から、「差別にあったら言い返せよ」と教わってきたので、ずっと構えていました。でも、実際に自分が差別を受けて、言い返すことができなくて、後悔をして、「私がこれまでやってきた学習って何だったんだろう」と思うこともあります。それだけではなく、もっと違うことを学習会で教わってきました。

差別に出会った時に、高校生友の会に帰って話を聞いてもらえとか、お父さんやお母さんに話を聞いてもらえとか、そういう仲間をつくってきた。そのことを経験できたことに感謝をしたというか、「部落に生まれてよかったな」と思えたんです。

だから、私が今関わっている子ども達には、「差別に出会った時に、『そうやな。その通りだな』と一緒に言うことはいけないけれど、一緒になって言わないのであれば、その時には負けてもいいよ。今は我慢していて、次に何倍も強くなって差別に向かっていく、そういう力をつけていくことに、あなたたちが頑張るのであれば、それでいいよ」と言っています。

私は、「頑張らなければ」「頑張らなければ」と、戦場に送り出すようなことは言いたくないので、そういう形で子ども達を育てる取り組みを私の地域ではしています。

もう、今は、「被差別部落の子」、そうでない子というのは関係ない。被差別部落の子には、差別に負けない力というか、差別に立ち向かっていく仲間づくり、そうでない子には、それぞれの子に人権がありますから、それぞれの子が持っている人権が脅かされていることに関して、立ち向かっていく力やそのための仲間づくりをしていける場ということで、法律は切れましたが、そういう社会の流れに上手く乗って、うちの地域では取り組んでいる最中です。

最後に発言してくれた彼女にアドバイスとして、私も今でもそうですから…。いつでも言えるということではありませんから…。自分で力を付けられるところをきちんと見つけていたら良いと思います。頑張ってください。

《パネラー C》

まとめてと言われたんですけど、まとめる気持ちは毛頭ありません。後半が始まった一番目に神山町出身の先生が話してくださったんですけど、「反省」という言葉がたくさん出たんですけど、「できることを」ということを言われていたんですけど、あの、はっきり言って、何もしなくていいです。

…僕が言いたいのは、「何とかする」とか、「自分の教え子に話をしに行く」とか、それは順番が違うんです。「申し訳なく思う。自分のやってきた同和教育を反省する。」もし、本当に反省して、前に向いてこれから本当に同和教育を教えていきたいんだしたら、もっと先にすることがあるんです。

……僕が先生の立場だったら、…まず、僕の家族に最初に謝りに来ますよ。何にもしなくていいです。(会場より「それはいかん」)

違う、違う、違う！だまっていてください…。(「いかん」)だまっという。(「それはいかん」)だまっという！僕がしゃべっているんです。

(「そういう言動は慎まないかん」)違う！違う！違う！だまっという。(「そういう言動は慎まないかん。指導者ですよ。こっちは。」)

僕だって指導者です。途中で中に入らないでください…。(「相手の人は指導者ですよ。あんた。」)だから、間に入ってこないでください…。

(「関係からしたら、弟子や」)違う！違う！違う！間に入ってこないでください。(「助言しとるじゃないか」)助言じゃない。

(「助言しとるじゃないか。C、おまえな！」)どこが…。(「先生ですよ！あの発言は。あんたね！パネリストじゃからと下に見とる…。」)違う！違う！違う！下も上も関係ない。対等。

(「そういう挑発的な言動は、逆差別を起こしますよ。」)

(Cさんは、コーディネーターの方を見ながら)わかったでしょう？わかったでしょう。今、わかったでしょう。(コーディネーターは立ち上がり話そうとするが、間に入れずタイミングを待つ)

(会場から言葉が続く「そういう言動は慎まないかん。」)今、神山町の先生と2人で話しているんです。黙っていてください。

(「演壇でねえ！言える言動と違う！！その言動は。滋賀県から来てる人、愛媛県から来てる人に、笑われますよ！」)笑いません。みんな僕のことをよく知っていますよ。(「時限が低い！その発言は！！失礼だ！失礼だ！君が失礼なことを言うな！」)僕の話の聞きにみんな来てくれているんですよ。

(「教訓にならん！」)教訓とか違うって。(「何ともならん！あんたの話は！」)フロアの他の参加者より、フロアより叫んでいる男性に向かって「黙ってもらえますか。')僕は前を向くために話をしているんですよ。先生を非難するために言っているのと違うんですよ。(「非難じゃ！」)非難と違うって…。最後まで話を聞いてから言ってくださいよ。

(「若いからええけどね」)違う。若いからとかそんなこと、違うって。僕は前を向くために言っているんですよ。人の話を最後まで聞いていない人は黙っていてください。(コーディネーターを見ながら)何とかしてくださいよ。

(「わしが言わなんたら、会場みんなが困っとるよ！」)ですから、最後まで聞いてくださいと言っているでしょう。

《コーディネーター A》

(会場からの繰り返される発言を制止しながら)先生、こちらでまとめさせていただきますので、こっちに任せてください！

《パネリスト C》

僕は今、そういうことを言るのではないんですよ。僕がここで現実を語ることはね、部落のおじいちゃん、おばあちゃん、おじちゃん、おばちゃん…。はっきり言って心臓を引き裂かれます。

あそこでカメラを回している宮崎さんも一緒です。僕らだって一緒に、心臓を引き裂かれます。僕が何のためにここで語るかと言ったら、先生、よく聞いてください。ここの前に小学生・中学生が座っているでしょう。この子らに同じ思いをさせたらだめしょう！！

僕、妹がおるんです。妹が結婚したんです。1歳7ヶ月の姪が生まれたんです。僕のことだったら我慢できます。僕と同じことを子ども等や、愛南町から来たこの子等や、鳥取から来た大学生のSさんに同じ思いはさせません！！僕の生き方はですよ。

先輩は優しいんです。確かに先輩は優しい。「差別する人も被害者やけん」って、優しいんです。優しい

優しいで、差別する人も被害者やと言うていたら、この子等は権利を主張していくことができないんです。

僕らがこの子らにしていかなければならないのは、伝えていかなければならないのは、「正しいことが最後に勝つ」ということなんです！違いますか！？正しいことをしているんです。特別なことをする必要はないんです。同和教育は難しくない。面倒な問題と違うんです。

僕は、高校3年生から毎日勉強！毎日闘い！その中で学んだことを言っているだけ。「先生に何とかして欲しい。」「教育長に何とかして欲しい。」昔、そうだったじゃないですか。議員さんを連れて、お父さん、お母さん、教え子のところに校長先生と一緒にいって。そんなこと、今の時代する必要はないんです。先生にお世話になった。そういう時代があったことを僕らは聞いてきましたよ。

僕らの時代は、そんなことをしなくてもいいんですよ！なぜかというと、先生方は、僕らに「同和教育」を教えてくださいませんか？教えてくれているじゃないですか。その教育を否定しないでください！

僕らは「いい同和教育」を受けてきて、3人4人、前に立っているんでしょう？「同和教育の成果」だと思ってください！（拍手）自分の教えてきた「同和教育」に誇りを持ってください！反省はしなくていいんです。後ろを振り返らなくていいんです。前を向いていきましょう。僕はそのためにここにおるんです。

9月7日に僕は神山町に講演に行きます。神山町の人に言わなければならないんです。神山町の人のお口を言っているのとは違うんです。神山町の教育を批判しているんじゃないんです。神山町にいっぱい知り合いがおります。温かい人を何十人も知っています。青年団は皆友だちです。

でも、神山町にこういう差別があるということが悲しいでしょう？僕はそのことを言うんですよ。最後まで話を聞いてくださいよ。

そのかわり、僕は、前に座っているこの子らに、僕と同じことは絶対にさせません。絶対にさせませんよ！！何があってもしなくていいんです！！行かなくていいんです！！頭を下げなくていいんです！！そんなことしなくていいって！！正しいことを正しいと言っていこうよ！何にも悪いことをしてないよ！正しいことが最後に勝つよ！正しいことが最後に勝つと言えなかったら、世の中終わりだって…。

俺は、そのために活動を続けているんです。そのためにみんなの前で語るんです。この子らに差別が降りかからない保障はないです！S

Sさんも、Dさんも苦労してきている。これから先も、もっと苦労することはいっぱいある。絶対！

僕らは、「同和教育」を振り返るのではなく、この子らが、この先、生きていく生命を守っていかなければいけない。未来を守っていかなければいけない。そのためには何かあっていうと、「正しいことが最後に勝つ！」何にも特別なことをすることはいいんです！我慢することはいいんです！

僕らは「同和教育」を受けてきた世代です。これを全国の人に伝えていきましょう。特別なことは辞めましょう！僕らは「同和教育」を受けてきているんですから…。

これが先輩に対する感謝です。（席に戻る）

《コーディネーター A》

時間が押していますから、終わりますが、最後にちょっと聞いてください。

「本気」と「本気」のぶつかり合いです。人間としての「誇り」です。差別は「誇り」をズタズタにします。ズタズタにされてまで、どうして謝る必要がある！

「人間」としての「誇り」！「人」としての「人」への共感！しっかりと自分のあり様というものを見つけていく。自分に「誇り」があったら、自分に「生きる自信」があったら、人をいじめなくてすむんです！人を差別しなくてすむんです！

堂々と生きられる私たちの価値観を持つ。そんな機会になったらと思います。ドキドキする場面が最後にありましたが、3人の思い、会場で語られた思いをしっかり担いでいきましょう。大事なものは「日常」です。「常」を大事にしながらか歩き続けていきたいと思っています。

最後に、一つだけ言わせてください。私は、2年前にここで『峠を越えて』というビデオを観ていただきました。私の教え子が出てきます。地区出身の教え子が、自分が地区出身であることを彼女の両親に言おうか言うまいかと揺れ続けました。

自分が地区出身であることを言うことによって、この良い関係が崩れはしないかと思って、揺れ続けたんです。結果として、彼は言いたくてたまらなかったのに言えませんでした。

でも、彼の思いを受けて、彼女が、彼女の父親と母親に言いました。「お母さん、実は彼、同和地区の人なんよ。そのことでいろいろ心配してくれよるんよ。いろんな思いがあるんよ」と言いました。

彼女の両親が言いました。「E子、まだ、そういうことにこだわって、いろいろ思う人がおるかもわからん。いろいろ言うて来る人はおるかもわからん。でも、それは間違うとるんだから、もし、仮に親戚でいろいろ言う人がおったら、お父さんとお母さんがちゃんと話をする。お父さんとお母さんが2人を守っていく。胸を張ってT君と幸せな家庭をつくるんぞ。これからは、T君との生活が長いんだ。T君と幸せな家庭を作って欲しい。順番から言うたら、親の方が先にこの世を去っていく。2人が幸せな人生を生きる。それをお父さんとお母さんは信じているから…。」

私は、彼女のその話を聞くたびに胸がいっぱいになります。「人間って美しい」と思います。差別をなくしていく関係というのは、人間が人間として生命輝く関係をつくるというのは、本当に美しいです。

皆さん、「美しさを求めて生きる人生」。そんな職場や、地域社会の関係をつくっていききたい。学校の、学年の、クラスの関係をつくっていききたい。「生命輝く人生」をみんなが生き、自己実現を可能にしていく。そんな、鳴門市を含めた周辺5町の営み、これからの「人権教育、啓発」を皆さんと共に創っていききたいと思います。現実には厳しいです。だからこそ、たくましく、豊かに、誇りと自信を持って取り組みたいと思います。

会場からご指摘がありました。気分を害された方もあろうかと思えます。でも、「自分に何ができるか」ということをしっかりかみ締め、ぜひ、アンケートの中に思いを綴ってください。それをまた、「啓発」の中に活かしてまいりたいと思います。

一生懸命魂の叫びをぶつけてくれた3人に、そして、フロアからいろんな思いを語ってくれた、それを一生懸命に聞いてくれた、一人一人に、お互いがお互いに、思いっきり拍手をして、この会を閉めたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

《司会》

講師の皆様、会場の皆様、ありがとうございました。それでは、閉会に当たりまして、鳴門市人権教育推進協議会、中川会長がごあいさつを申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会 会長》

失礼します。閉会に当たりごあいさつを申し上げます。残暑厳しい折、何かとお忙しい中、「人権地域フォーラム」にご参加いただきありがとうございました。

わが国の現代の繁栄と、平和のためにも、部落差別の現実を改めて知ることができました。これを解決すべく取り組まなければならないと思っております。

わが市でも、行政も、同和对策審議会答申、特別措置法以降、人権教育推進協議会と協力しながら取り組んできました。いずれにいたしましても、一人一人の人権意識を高めることが大切であろうと思えます。

本日の「人権地域フォーラム」には、大変お忙しい中、昨年に引き続き、Aさん、Bさん、Cさん、Dさんにお願ひし、快くお引き受けいただきありがとうございました。皆さんそれぞれ、日常の実践や、活動を通しての取り組みや、熱い思いを語ってくださいました。また、会場の皆様方にも、自分の思いや、平日頃の人権問題に対する思いを語っていただき、人権意識が高められたと思っております。

『ひとごと』から『わがこと』へ」をキーワードに、同和問題を通し、自己の生き方、あり方を見つめ、語り、人と人がつながる学習は、行政、企業、地域社会、家庭、それぞれの課題でもあり、特に社会意識としての差別観念の払拭に取り組まなければならないと考えております。

この「人権地域フォーラム」も松茂町、藍住町、北島町、板野町、そして今年からは上板町の教育委員会や、人権教育推進協議会のご賛同もいただき、厚く感謝しお礼申し上げます。

最後になりましたが、本日「人権地域フォーラム」に御参加くださいました皆様方にも厚くお礼申し上げます。Aさん、Bさん、Cさん、Dさんの今後の御活躍をお祈りし、感謝を込めて皆様方温かい拍手をお願いいたします。(拍手)

終了

《参加者の意見・感想》

◎今年の、8月25日に鳴門市において開催された、「人権地域フォーラム」2度目の参加でしたが、語られた思いの全てに、今も続く差別の厳しさと、「人権教育」「同和教育」を学び実践していくことの素晴らしさを、身体いっぱい、心いっぱいに体感したフォーラムとなりました。

「この日の思いを、参加した多くの人と共有したい。」「『人権教育』、『同和教育』と、本気で関わり続けている多くの人に届けたい。」その思いで一文字一文字をかみ締めながら文章にしました。編集を進めながら、当日の、あの場所に今も座っている私自身がいます。決して過ぎ去った思い出にしてはならないと、改めて心熱くなる私がいます。

参加したそれぞれの思いを通して、真に「人が人として『誇り』を持ちながら生きて行ける」。「誰もの暮らしの中に『安心』がある」。そのことを本気でめざしていく「学習」・「啓発」のあり方を、一人一人に問われたフォーラムだったと思えてなりません。

一人一人のできることは、ささやかなことかもしれません。けれど、ささやかな日常をしっかりと大事にしながら、声に出し、歩き続ける人のつながりと広がりの中でこそ、どんな大きな事でも実現できる。そう信じます。

今の、社会の現状の中だからこそ、この冊子を手にしてくださったあなたと共に、人としての本当の生き方を問い続ける「人権啓発」「同和教育」をめざしたいと思います。

◎パネリストのCさんが発言された結婚問題は、すごく心に残っています。私はCさんたちの思いを受け継ぎ、本気で差別をなくしていきたいと思います。(中略)A先生の言われる「人と人がつながる学習」は、とても勉強になりました。だから私は「差別される人間ではなく、差別を無くす人間になりたい」です。

◎初めての参加でしたが、こんなに心が震えたのは久々です。自分なりの人権意識というものを高めるきっかけになったと思います。ちなみに、子どもに人権や差別のことを教えるのは大人かもしれませんが、小・中・高校生の意見にも耳を傾けて、教わろうと思いました。

◎過去において、差別をされたことも無い。したがって、現実問題としてあまり深く考えていなかった。本日、パネリストの話聞き、現実には厳しい差別があることを実感し、もう少し真面目に取り組んでいきたいと感じた。

◎最後に発言した、大学生の発言を受けて、彼女の言っていた「安心して語れる空間」をもっともっというところなど広げること。そう考えると、おのずと、自分がこれからすべきことが見えてきた気がします。